

平易な節調と、俗衆の好尚に投ずる熱演と、未開拓であつた俗曲の餘興と、要するにこの三つが雲月の人氣と地位とを決定的のものとしたのである。

加ふるに明治四十五年一月末、二六新報主催、兩國々技館に於る雲月の「山鹿護送」「五郎正宗」には二日間の聴衆五萬を數へた。いよ／＼盛名は大となつた。

が、この少年大家は、やがて腦に疾患を來し、高座を退くの已むなきに至つた。遮莫、その郷里たる肥前唐津に赴きて見よ。

今尙、彼が廢人の身を横へてゐる雲月町と云へる一廓がそこにはある。

その街全體、じつに初代雲月所有の土地ではあるのである。

以而、往年の全盛さが知れよう。

門下の雲月嬢、二代目雲月を襲名してゐる。

追記——昭和十七年二月六日附、都新聞に左の初代雲月夫妻の近況が報道されたので、紹介しよう。

『雲右衛門、奈良丸、小圓、若丸の浪曲黄金時代に續いて樂燕、虎丸、雲月時代

を築き、弱冠十六にしてその美聲名調に浪界を風靡した初代天中軒雲月は、昭和六年四月福岡の驛で發狂して以來、故郷佐賀縣の唐津に病を養ふ身となり、いまは福岡縣立筑紫保養院の一室に「語るぬ浪曲家」となつて虚な生活を送つてゐるが、足掛け十二年その身をけづりその心を傾けて、狂へる夫の看護に盡くした原田君子さん(四七)の貞節は單に浪界の美談たるのみならず廣く藝界の龜鑑であるとして、日本浪曲協會が表彰、伊東深水畫伯に依頼した「日本貞婦之圖」を贈り、その勞苦を稿ふ事となつた。

變轉極まりない藝界にあつて初代雲月といへば「義士傳」の赤垣源藏、岡野金右衛門「俊寛」「玉菊燈籠」など今尙傑出した演出として斯界の語り草となつてゐるが、十三で九州の大看板早川勘之助に入門、半歳にして眞打となり一座を組織して、十六歳東京舊有樂座の舞臺を踏んで以來は、聲量豊富節廻しの變轉自在は古今無類とされて弱冠既に大家の列に入り、一世を風靡する人氣者となつたが、三十六歳の春熊本へ巡業の途上發狂した後は全く無言の人となつて、或る時は撞球に熱中し、

或る時は唐津座、近松座などといふ故郷の町の劇場に一観客となつて、撞球場も劇場も月極めの常連となるなど、いふ毎日を暮してゐたが、常にその傍らには妻女君子さんが付添ひ夜も眠らぬ努力が續けられたのであつた、初代雲月の唐津の家は豪壯を極めたもので、虎丸その他がその建築を模して自宅を作つたといふ程のものが、雲月が保養院に入つてからは妻女が學生専門の下宿を営み、看護の傍らよく内助の功をたて、家政に努力、疲勞の結果病に倒れた事もあつた、これを聞いた日本浪曲協會では一月卅日の總會に君子さんを招きそのかみの同志樂燕から表彰状を手渡した時には、感極まつて一同萬雷の拍手を送つたが「日本貞婦之圖」は近く完成の上贈呈する事となつた、牛込の現雲月事務所で原田君子さんは恐縮し乍ら語る。女として當然の事を致したにも拘らずかうした表彰などして戴きました事は矢張り二代目雲月なり、永田貞雄さんなりのお力であると皆様にお禮の言葉もございません、この頃では新聞なども讀みたがりますので歸りましてから夫にいろ／＼傳へたいと存じます、初代雲月の名を恥しめぬやう今後も一生懸命に夫のために

盡くしたいと存じます』

津 田 清 美

滿鐵社員から中年にして浪曲家となつた津田清美が、いつしか人物の活寫に長じ、あれ丈けの腕となつたことは確に異とするに足る。

従つて彼は普通人以上の常識もあり、趣味もあり、書道にも參じてゐる。

「義士傳」を主とし、「召集令」なども讀むが、「義士傳」の中の「大竹朝風呂」を聽いて感嘆した筆者の『浴泉藝談』なる一文を、左に掲げよう。

『伯龍の「天保六花撰」で、大嵐の晩に直侍が三千歳を廓抜けさせた翌朝、何食はぬ顔で仲之町へ戻つて來て湯に入つてゐる、すると同じ湯槽の中に大口屋の若い衆が漬つてゐて挨拶を交はすあすこのところをよく聽くけれど、も一つお湯へ入つてゐる感じが、こちらの身に感じられて來ない。そのくせ大雨上りの仲之町の登石なんかはとてもハッキリ目に見せて貰へるのだけれど。』

どうしてだらうとおもつてゐたら、その、ち清田清美と云ふ人の浪花節で「大竹の朝風呂」を聴いてその謎が解けた。大竹重兵衛と町人の會話の中には、しばしば「熱いのがでて來ました」とか、「オイそつちの方を掻き廻せ」とか、さうした意味の言葉が交はされる。それで、聴いてゐるこつちの身體にまで、チャーンと快くお湯の加減が傳はつて來るのだつた。關東節でないと親近な感じがないので、じつは半分バカにして聴いてゐたのだつたが、清美と云ふ人、仲々バカに出來ない腕を持つてゐるなとそのときおもつた』

清美の、本格な巧さが、此で肯げよう。名手神田伯龍も、畫龍點睛を缺いたポイントを、いしくも彼は擱まへてゐる。

この文中にもある通り、彼の節調は、雲節から分岐してゐる。樂燕は勿論、雲月と云ひ、この清美と云ひ、雲右衛門没後も尙且、雲節の亞流はいでて、流れて、覇を競つたのである。尙、大正初年の日蓄には彼自ら吹込んだ「清美ぶし」なるものが二種もある。二種の掛聲の「タイショ」云々は、大正の意味か、それとも「大將」

なのだらうか。試みに二篇ほど掲げて見よう。

父の無情に姑しゅうごのぢやけんタイシヨ血を吐く思ひの生さぬ仲タイシヨく

ゞゞいづこいつの用捨はないぞタイシヨやがて敵壘も占領する、タイシヨの戦争
前者は柳川春葉の「生さぬ仲」、後者は日獨戦争。奈良丸くづしやごんく節のごとく一般人が歌ふまでには至らなかつたが、悔りがたかつた人氣は分らう。

吉川小福

浪花節史を彩るロマンティックな女性として、明治中世の浪花節お千代のほかに、吉川小福が數へられる。

偶々、あをば生の「浪花節お千代」の中に、『大阪登りの吉川虎丸一座が掛りしに（中略）中入前を虎丸の娘と云ふ美人が勤むるに、お千代は其三味線を弾いて』とあるを見れば、數奇の二女性はかくして嘗て一堂に會してゐる。いよいよ宿命を感じずにはゐられない。

小福は長ずるに及んで全身の刺青。純關東節をよくし、「國定忠治」「赤尾林藏」を得意とし、しかも品の好い讀口であつた。今日の富士月子をやや尖らせた感じの顔立ちで、器量も十人並であつたと聞く。

この小福が、身狀が悪い。袁彦道に身を持ち崩し、朝夕、賭場に丁半を争つたのである。

横濱の壽亭出演のときは、契約金を取つて置きながら、その日も勝負事のため無斷休演してしまひ、横濱切つての大親分、かの雲右衛門と兄弟の盟約をした澤野と云ふ人に取つて押さへられ、さんざんに油を絞られた。以來、一切、賭博はやりませぬと一札を入れたにもかゝらず、間もなくその壽亭の樂屋で勝負を争ひ、又々負けてたうとう素裸となり、次の興行地へ行けなくなつた。流石の小福も合はず顔なく、切腹したが、一命を取り止め、腹部を縫ふとそのままその足で興行先へ乗込み、見事に一段語つたのには、おごろかないものはなかつた。

その後も小福は勝負事のため身が持てず、つひに二進も三進も行かなくなつて、

自宅で猫いらず自殺を遂げた。その最後のときもなかくに度胸があり、居合はせた曲師戸川小淺に

「私、いま毒を飲んだわよ」と彼女は微笑んだ。

小淺の方は何を冗談を、と思つて聞いてゐたら、やがて傍らの箆筒へつかまり、ウーム、ウームと唸り出した。おごろいて立上がると、

「いけない、騒いぢやいけない、もう駄目なのだからしづかにしてゐて」

さう云つて箆筒へつかまつたまま唸りつづけ、間もなく一絲亂さぬ落着いた姿で死んでいつた。享年四十餘歳。

切腹直後、腹を縫つて次の出演先へ行き、一段語つた度胸も大したものなら、従容とした最後の姿も、凡ではない。

もし、これだけの情熱を、己の藝道に傾けつくしたら、さらぬだに品好く上手だつたと云ふ彼女である、いか許り不世出の名人となつてゐたことであらう。

返すくも惜しい氣がする。

初代 浪花軒 友

二代目浪花軒太の一門となつてゐたが、直門ではない。今日も寄席を打つてゐる高島家右衛門一座なる浪花節芝居。この先代右衛門の門下である。

踊りが出来、聲色に長け、清元を語り、小唄が巧い。

稀に見る才人粹人だつた。

金襖物では「柳生旅日記」が名高く、端物では「祐天吉松」「小夜衣草紙」にその才幹を諷はれた。

聞くならく彼は異常性格の才人で、常に奇行百出であつたらしい。見ず知らずの氷屋の、オガ屑の一ぱい詰つてゐる氷藏の中へ、いきなり盛装したまゝもぐり込んで、そのオガ屑の中へスツポリ全身を包まれ、

「モモンガー」

と叫んだ。

此には氷屋も驚いたさうであるが、かうした言動は、殆んど常であつた由である。興至れば、深夜と云へども、先輩友人の家を訪れ、斗酒を辭せず、談論風發すること珍しくなかつた。

落語家と交り、講釋師と交り、田臭紛々たるもの少くなかつたこの時代の浪花節の中では、獨り江戸生粹の「藝」と「生活」とを賣物にしてゐた。

バイオニヤと云ふ、横濱方面にできてすぐ潰れてしまつた圓盤會社に、この友の「祐天吉松」(二枚)と「柳生二蓋笠」(一枚)がのこつてゐる。スフィンクスレコードからは「猫の目玉」と題する外題附が發賣されてゐる。へ變り易い世の中に、猫の目玉が目に三ど」と云ふあの外題附である。バイオニアのときは、吹込料はいらないと啖呵を切り、喜んで無料で三枚、吹込んでやつた。かうしたところにも、友の面目躍如たるものがある。

その「祐天」のレコードは、例の、吉松が下谷幡隨院の出家となつたところであ

るが、

「世辭で丸めて浮氣でこねて……」

と、この吉松、清元の「喜撰」を器用に歌つてゐる。

本所へ用達にゆくことになり、

「破れ衣に破れ傘……」

と、はじめて關東節で仇つぼく歌ふ。

才氣横溢の一段である。

嘗てある落語の寄席へ出演したときには、今日の都々逸坊扇歌改め燕枝が、フン浪花節が出るのかと輕蔑して云つたのを小耳に挟んで高座へ上つたべ友は、大石内藏助は雲節で歌ふとその人らしいが、關東節で歌ふと大石の二の腕に彫物がありさうであるとか、反對にめ組の辰五郎の場合は雲節では可笑しいとか、飄逸洒脫の浪花節漫談のみ試みてつひに浪花節を少しも語らず、最後に手踊り一つ器用にやつて

のけて高座を下り、完全に燕枝を恐縮させたと云ふ逸話がある。づぼらをつゞけては席を休んだが、休んだ翌日は大真面目で出席して充分に前夜の分を取返す丈けの大熱演を、必らずした。かうしたところが同じづぼらでもあくまで他の小柳丸や太郎や重浦でなく、何も彼も心得てやつてゐたづぼらなのだつた。餘程、聰明な男だつたと云へよう。

震災直後、惜しまれつゝ、死んだ。

木村重浦

木村重浦は、今も寂しく近隣の寄席を打つてゐる。妻女が關東節では一、二を争ふ曲師であるから、決してしがたない暮らしはしてゐないけれど、惜しい。重正の高弟で、師匠とはちがひ、身體一つ動かさないで、しづかに、小意氣な關東節を聴かせた。「寛永三馬術」の鬼鹿毛であらうか、あのじやじや馬を、曲垣、丸目が手馴付けてしまひ、仲間たちをアツと云はせる。その手馴付けに行く前後の段取りには

不思議にコクのある可笑しさがあつた。一體に「祐天吉松」の岩田屋敷焼討とか、「文化白浪」とか、「小猿七之助」とか、「日本左衛門」とか、さうした端物にはほんたうのいのちがある。ギンを舍む聲と専門語では云ふのであるが、燻しにかけた銀か錫の器に見られる寂しさが、重浦の節廻しにはたしかにあり、ハ銚子のそばの松岸の、さる大盡に請出され」など、いかにも關東節らしい文句が實にピッタリと似合ふ節であつた。

どうしてこの人が半途にして挫折したか。詳しいことは知らないけれど、大それた角力に交つてしじう取的をひるきにし、自分自身も鬚を結び、巡業先でも土俵を作らせて、晝は飛入勝手の素人角力などをやり、自分を負かしたら米俵を景品にやるとして人氣を呼んでゐた。そのうちだんだん本業の方がおろそかになり、麴町の寄席へ看板を上げて、銚子で一杯飲んでゐたこともある。放送のとき急に行きたくなくなつて代演を差向け、大目玉を喰つたこともある。さうしたら、あとで本人の云ひ分が可笑しい。

「べら棒め、放送局だと思ふから代理をやつたんだ。寄席なら休みつ放しに休んぢまはあ

かう云ふのにかゝつては放送局も三文の値打もない。しかし、この種の奇人肌の男は、もう今日はゐない。よし、ゐても、生活してゆかれない。昔はかうしたルーズをも、藝の巧さで寛容してやつたが、いまはさうした假借を許さない。あくまで十重廿重の規律の中で、一頭も二頭も抽んでた名人を創り出せと要求してゐる。容易には美しい「花」が咲かないわけである。

重浦のレコードは、古くオリエントに「日本左衛門（白浪五人男）」が、鷺印に「國定忠次」が、近くオデオンに「祐天吉松——岩田邸焼討」が、バルロフォンに「日本銀次」が遺つてゐる。

鷺印のと、オデオンのと、殊に、聴くべき彼独自の節調がある。

東 家 樂 鴈

東家悟樂齋（先代樂遊）の高弟である。

よく肥満した小作りの男で、軽い、愉しめる高座振り。

「成田利生記」「吉原百人斬」「滿洲血染地圖（南京松）」「鶉權兵衛」「累ヶ淵」このほかに、義士傳も讀んでゐた、一方の大看板であつた。

死後、オデオンレコードから「吉原百人斬」の八橋、榮之丞を殺す件りが發賣されたが、死の直前の吹込であつたためか、陰々たる中京節と琵琶調擬ひの節許りで、少しもありし日の、江戸前の節調に接しられなかつた。

寧ろ、舊版のオリエンレコードの「滿洲血染地圖」がいい。

大陸の酒場街。お松と云へる洋妾が麥酒瓶で、南京人を一撃しようとする、此が、なんと日本人。

ヘアラ珍しや日本人、

何ゆゑあなたはそのやうに

髪をのばされ 支那人に

姿やつしてゐらるぞ……

樂鴈得意の樂遊節には、先代樂遊全盛時代の節をば、はるかに輕快に、サラリと歌ひ棄ててゐるよさがあつた。

その支那人こそ、日本の軍事探偵柿崎であつた。ウリスタ大佐の愛妾たるお松に、黄金山の地團をば入手して呉れと土下座して頼む。そこが、全篇のヤマ場であつた。

高座でも、随分いろいろのものを聞いたがなせか筆者は「熊野靈驗記」の宿屋の件りの、草三郎と主人との輕快なやりとりが印象に深い。そのころの手記には、こんなことが書いてある。『樂鴈は故桂やまとの落語のごとく餘り輕快に巧すぎて、却つてほんとの認められ方になれなかつたのぢやないでせうか。役者で云つたら、故菊四郎にあたりませうか』

この樂鴈、たしか昭和五年夏に没した。

東家小樂燕

先代小樂燕、樂燕門下でありながら、重松系の關東節であつた。

同じ巨大漢でも、樂鴈よりは長身で、目を閉ぢ、姿勢正しく歌ふ姿は、大いなる眠り猫を見る思ひがした。

歌ひ尻の細く長く、いつまでもよよと咽んで盡きないところ、仄かに白い哀愁が感じられ、ちよつと得がたい節調であつた。

それあるが故に、「鹽原多助愛馬の別れ」の、

へとめて呉れるな　これ青よ

却つて涙の種となる

がさしぐまれ、「釣天井」の、

へいまの言葉は伯父さんへ

秋の紅葉でうらおもて

忘れはしないぞ　この通り

が胸に浸みた。殊に、その「忘れはしないぞ」の『ぞ』で長く引き、へこの通り』の『り』で『りイイイイ』とまた引いて陰に落す。

しみじみとさびしく、よかつた。

「祐天吉松」の飛鳥山、七松との再會では、

へちるは花やら　涙やら……

が涙の目の中に全山の櫻花見え、本郷一丁目煙草屋店先へかゝる件りでは、へ紺看板に梵天帶、

真鍮銅輪の木刀で

小石川なる水戸の館をあとにする

前は小日向水道べり、落行く先は神田川、右に高いは富坂か
いつしか來かゝる壹岐殿坂の……

の冒頭の出に、「江戸名所圖繪」の挿繪のごときあの邊りの景色があらはれて來た。

但、小樂燕の會話は、新聞を音讀してゐるやうな感情のない、朗讀調で至つて無味だつた。

伯樂となり、二、三年前、末冴えずして死んだ。

小金井太郎

先代勝太郎門下で玉川太郎。今の勝太郎が次郎で、太郎次郎は兩翼の觀があつた。プスリ肩先から突込んだ合口からポタポタ滴り落ちる血の紅さ。さうした果敢な節廻しであつた。氣性の通りに癩癩持らしい、ぐ、ぐと急つ込んだ節の節尻には何とも餘韻の長い悲哀感が滿ち溢れてゐた。「越後傳吉」の故郷歸りなどは、この人が死んで、もう誰からもあの味は聽かれまい。さんざ故郷の忘じがたさを説いたのち、「それに引代へ、このごろのヤローは」と、例の〆國を出るときや涙で出た

が今ぢや故郷の風もいや」と云ふあの唄を引いて罵り「へッ、罰當り野郎め」と吐出すやうに云ふが否や、問髪を容れず一とふし、〆頸城郡が寶田村」と高らかに歌ふ。「是より越後國」と誌された道路元標が、なつかしくそれに見入つてゐる傳吉の旅姿が、ヌーツと大寫しに目に見えて來た。

さて傳吉が故郷へかへると、しづかな日ざしに濡れてゐるそこかしこの藁葺からは、いろいろさまさまの人たちがゾロゾロとびだして來る。さうしてイソイソ傳吉を迎へる。その國訛りの微笑まじさ、また可笑しさ。もう、もう、こんな浪花節は聽かれない。「宇都宮釣天井」のおいねと與四郎の忍び逢ひから、與四郎の死までも、太郎は得意としてゐた。

〆今あなたの仰せをきけば

三代様をはじめとして

列るお供の諸大名

きいても身の毛のよだつやうな

死出の旅路の釣天井……

その「きいても身の毛のよだつよな」の終りの「よな」を、不思議な高音で「なアアア」と巧みに歌ひ伸ばしてゐてまこと身の毛のよだつを感せしめた。スケイルは小さいかもしれないけれど、得がたい才物であつたとおもふ。太郎は、さる美妓との傷心事から自棄の淵に沈み、あばれ酒の限りをつくし、飲めばあやしき幻を見て狂ふ、路上つかみ合ひの喧嘩をする。さうして一生をめちゃく〜にしてしまつた。筆者の貧困時代にその貧乏な筆者の所へ轉げ込み同居してゐたことがあつたが、毎晩の亂酒ホトホト困じてつひに居候の太郎をのこし夜逃げをしてしまつたこともあつた。それも微笑ましい思ひ出である。昭和十一年五月、太郎は淺草裏の陋巷で、盃を手にしたまま、ポツクリ死んだ。死んだとき、棺桶の中がムンムと酒の匂ひで立ちこめた。この葬儀一切を弟弟子である今日の勝太郎が一切、花々しく營んでやつた。

太郎のレコードは古く鷺印に「夕立勘五郎（さんばら辰）」が、前期トンボレコー

ドに「河内山」「宇都宮釣天井」が、後期トンボレコードに「釣天井」「高橋お傳」が吹込まれてゐる。

東洋軒雷右衛門

この人も京山大教のごとく、關西節で、關西人で、京山派の出身であり乍ら、その生活は東京でなされた。

落語に於る桂小南や小文治のごとく、かうした宿命の人は、いづれの藝界にもあるものである。

輕快圓熟の滑稽讀。

たしか、昭和八年ころまで健在であつた。

「黄門記」が白眉であつた。

雲井雷太郎

赧ら顔の大男で、可笑しな表現を許して貰へるなら、江戸前の關西節であつた。後述する小柳丸なども、それとおもふ。江戸つ子に共感できる關西調なのである。

この人、『五郎正宗』などもやつたが、『村政勘次』の鼠阪の斬抜けのみがおもしろかつた。土木に取材したもので、達磨茶屋のやうなところへ刑事が張込む。そこを勘次が斬抜ける。その刑事の從けてゆく姿を、大兵肥満、船頭然とした雷太郎は、絶えず扇子を左の手から右の手へ、また右の手から左の手へ、奇妙にうつし變へながら、それで拍子をとつて歌ひ、描いた。雷太郎などは所詮が二流以下の看板だつたらう。が、近世では僅にのこされてゐるこの種の特異の素材をおもしろく語り得る一人だつた。で、掲げた。

昭和十一年ころ、死んだ。

港家 小柳丸

港家柳蝶門下である。

幼にして賣出した。

この人も昭和十年ころ没したが、そのとき四十歳そこそこ聞いてさらに一驚した。盛名を聞くこと、餘りにも久しかつたからである。

いまにも一と雨來さうな大利根の川水をおもはせるあの暗い悲しい小柳丸の節、一つ一つ嚙んで含めるやうな啖呵も、人物情景よく描破するものがあつた。へほれた女が凶狀持なら、かよふお客も凶狀持」とか「寒や北風けふは南風あすは浮名の辰巳風」とか、小柳丸の歌は悲しい文句許りであつた。「小猿七之助」で花川戸のお瀧の宅の前を七之助がとほりかゝる。と、向ふの夜空へポーツと吉原の灯がうるんで見える。その空のいろが、花びらの色に美しかつた。「明石の斬捨」の浪人が行列を横切つて斬られた我子を嘆き悲しむ一とふしも哀しかつた。その「斬捨」の中で「前の小川で菜を洗ひ」と云ふ一と言により水美しい三島宿の景色を髣髴たらしめたところにも、筆者は小柳丸の非凡を感じた。「龜甲組、二引組、土木の達木」と云ふいかにも浪花節らしい語り物をも得意としてゐた。關西鐵道の工事を、この

二つの組合が争ひ、形勢不利の龜甲組は女房や娘を遊女に賣つて金策にかゝる。すると勝誇つた二引組が彼女たちの賣られた廓へあそびにゆく。二引の奴らを客にとるかど、泣いて女たちが啖呵を切る。そしてひどい折檻にあふ。ところへ、俄に龜甲組へ工事が許されることになつて、組の人々が女房や娘を請出しに来る。さうしたいかにも明治氣分の殺伐な物語であつた。行友李風氏の原作ではなかつたかともふ。晩年、小柳丸は酒毒のため、身體中へ盡く注射を打ち、しまひには打つ所がなくなつてしまつた。それでも無理に注射を打つては又酒を煽り、高座へ上る。さらぬだに暗鬱な節廻しが一段と暗くいたましくなつていつた。その悲痛な調子で最後にこの「龜甲組」の責場を聴かされたことがある。聲が皺枯れてしまつてゐるため、凄さが餘り真に迫つて、おもはず筆者は耳をふさいだ。「關宿六人男」とか「安中草三」とか「深川裸祭」とか、激しい人間愛憎の姿をえがいては肉迫して來るところ、小柳丸には長谷川伸文學中のある作品をおもはせるものがあつたとおもふ。

x

追記。小柳丸没年を記した新聞が、切抜帳の隅の方からいま発見された。この新聞へどうでたものやらも分らぬ古び汚れた紙片であるが、とりあへず左へ掲げておく。

『先頃來肝臓硬化症を病み去る五日下谷杉山病院に入院加療中だつた浪曲一方の重鎮港家小柳丸(本名栗原留吉)は去る十日午前一時廿分遂に永眠した享年四十二。同人は幼少の頃から浪花節を好み十二歳より十五歳までは獨自修をしてゐたが、十五歳の春港家柳蝶に弟子入り港家小蝶と名乗りその後小柳より小柳丸に改名港家派の宗家となり今日に至つたもので、得意の讀物は小猿七之助、龜甲組、はだか祭等の三尺物であつた。』

尙葬儀は十五日午後一時より二時迄本所區向島須崎町二四六の自宅に於て樂燕、友衛、重勝、綾太郎、虎造、樂遊、勝太郎等が親族總代となつて執行する』

伊藤高麗右衛門

新潟地方に五色軍談と云ふものあり。

浪花節と祭文とをつきませたやうな物語體の俗曲であつた。

伊藤高麗右衛門は、その五色軍談からいでて、浪花節の世界に投じた。

關東節で、新作古典何れにも長じ、晩年の高座には侮り難いものがあつた。

いろはを名乗つて隠退した。

篠田實

「遊女は客に惚れたと云ひ

客は來もせでまた來ると云ふ

啞と啞との色里に

恥もかまはず身分まで

よう打ちあけて呉んなました……

全國的に喧傳された篠田實の、有名な「紺屋高尾」の一節である。「云ひ」を「ゆ

ひ」と發音して歌つてゐた。

「來年三月高尾が來るウ」と云ふところもよく一般に歌はれたし、「水にうつりし月のかげ、グツシヨリと、ぬれてみたいは人の常」などもしどろ口の端に上つた。一つの浪花節全體が、かくも部分的に幾ヶ所もく持離され、歌はれた例を聞かない。昭和に入つてからは、榎本健一によつてさらに屢々唱はれたとおもふ。

「紺屋高尾」云ふ迄もなく、人情噺ダネである。雲右衛門が義士傳を教はつたと云ふ、かの金原亭馬生など十八番の一つであつた。

しかし實は決して此を賣物にしてゐたわけでも何でもない。ヒコーキレコードへ專屬吹込中、材料に盡きて、ほんのかりそめの滑稽物として吹込んだのである。が、「安兵衛婿入」や「豊臣昇進録」や「越の海勇藏」を讀む當時の實のものと、こんなケレン物は、會社も一向に有難がらず、ストックとして未發賣のまゝに打ちすてて置いた。然るところ、震災後、ヒコーキレコードは追々左り前になつていつた。もはや、毎月の吹込料金の支拂ひすらが覺束なくなつた。據所なくストック

品たる「紺屋高尾」を發賣した。と、ごうだらう。此が俄然ヒット。驚く可き勢ひで、羽の生えたやうに賣れて行つた。許りではない、單なる中堅に過ぎなかつた篠田實を第一線へ進出させた。壊滅に瀕したヒコキレコードをも旭日昇天の勢ひにまで盛返させてしまつた。會社再生の大恩人として、ヒコキレコードがコロムビア合併後も、篠田實は會社の重位を占めてゐると聞く。ものゝ流行とは、徒らに凝り過ぎ、考へ過ぎたところにはなく、ふつとかりそめの思ひ付きにこそあるものだと嘗て古川綠波君結婚式の席上、小林一三氏は筆者に語られたが、全くその通りであることをおもはないわけにはゆかない。

實は、以後十年、全くの「紺屋高尾」一本槍で興行した。一年三百六十五日、此許り語るため、しまひには語り口に熱も感激もなくなつてしまひ、その高座は宛か許「偉大なる倦怠と云ふものの姿」を見せられる思ひがされた。稀には他のものを演らせて呉れと、實が高座から頼む。と、客が反對する。たうたう怒つて引込んでしまつたことさへ、あつた。こんなことも亦、浪花節の歴史の上で異例である。

篠田實は、斯界稀に見る人格者であると思つたへられてゐる。他と變つてゐることはたしかで他の人々のごとく一族郎黨を引具して吹込に來ることもなく、單身着流しでスタヂオへあらはれてゐる。

事變以前であつたが、豊橋方面へ、毛織物會社を設立したのも亦、彼であつた。實の出生地は、丹波福知山。全くの獨立獨流で、修業は十二歳から關西地方に於てなされたが、十五歳にして夙くも日蓄吹込。その後の歩一步の賣出しは東京であつた。

若き日の彼の『安兵衛婿入』などは、
へ牧方を夜舟で下る楫の音

と例の安兵衛の熟睡するあたり、後年の飄々たる節調とは全く趣を異にして、情熱そのものの發露であつた。「紺屋高尾」の豫想外の大流行を契機として、自然に實の節調は輕妙感をそゝる世界へと、轉じていつたのであらう。

が、漸く「紺屋高尾」も忘れられた事變後の今日に至つて、篠田實は、ほんたう

の圓熟境に到達したと見ていい。先年、AKから放送された水野草庵子君作「露營の歌」を聞いたとき、その中で多くの兵士が異口同音に「分りました」と、叫ぶところ、實は自分唯一人の「聲」でこの數名の兵士の一齊に叫ぶ有様をば、マザマザと耳に訴へて來た。しかも、それは二代目雲月流の、苦心のあと歴然と見ゆる式のものでなく、あくまで淡々たる中に、異常の表現をしたのである。
一驚せずにはゐられなかつた。

二代目 浪花亭 愛造

頃頃は承安四年の夏、承安（鹽館）と云つても大福のことぢやねえと歌つた愛造。

辨慶のヤローが坊主頭に鉢巻してイと歌つた愛造。

美男であつた初代に引代へ、鍛冶職人出身のこの二代目は、大兵にして容貌魁偉。

節も、啖呵も、風貌と全く同じに、亂暴狼籍を極めてゐた。

かう書くとただ重正をおもはせるが、さらにさらにスケイル大きく、聲量も亦、豊富であつた。

重正も大酒で死んだけれど、この人も大酒のため發狂して、すみだ川へ投身した。幸か不幸か、このとき彼は直ちに助けられたが、間もなく今度はほんたうに縊死してしまつた。

藝風の哀しき自棄をそのまゝの、いかにも暗澹たる最後であつた。

十八番の演題に「國定忠治」があり、他に「鍋島の猫」「太功記」お家物の「源平盛衰記」があつた。辨慶のヤローが『云々は、その「盛衰記」の二齣である。

大正年度の關西浪曲

京 山 恭 爲

明治末に聲價を歌はれ、大正、昭和の現在まで不變の地位を保ちつゞけてゐる元老京山恭爲は、恭安齋の高弟。

彼が若き日の修業はすべて、東京に於て行はれた。

新聞小説その他、専らこの人は新作許り採上げたが、節は少しもおもしろくない、只管、啖呵が喝采を博した。

しかも、關西浪曲史を通じての藝上手であると言はれてゐる。たしか三芳屋版であつたらう、京山恭爲探偵浪曲集と云へるが、上梓されてゐる。

初代 日吉川秋水

「大久保彦左衛門漫遊記」とか「水戸黄門漫遊記」とか「藪井玄以」とか「鍵屋騒動」とか、滑稽畑のみ掘り下げていつた奇才に、初代日吉川秋水がある。

飄々と他愛ないあの独自の風格は、兎にも角にも今日、門人の二代目秋水、秋齋の上へのこされてゐる。

腰を曲げた大久保彦左衛門が何か呟き乍らヒョコ／＼と卓子を離れて歩き出して行く飄逸さは、秋水獨持のものであつた。

藪井玄以の、例の按摩は拙くて錢は高いと云つたやうな云ひ立ても、現秋水がそのとほり演つてゐるが、あすこのペースある節廻し。たしかに拓いた『路』と云へよう。

全大阪の浪曲愛好家は、初代秋水のユーモアに笑殺されつくした時代があつた。

中川 伊勢吉

隠退するまで親友派の頭取を勤め、關西浪曲界有数の信望ある人と云はれた。

嘗ては、美音天下一と歌はれたと聞くが、筆者の接した晩年（昭和三年）の高座は、いかにも枯淡な物寂びたもので、節もはやジツトリと落ち着いてゐた。

デツプリとした品のいい中老で、「高野長英夢物語」を語つたが、長英の開國論の一席で、ヤマもなく、波瀾もなく、徒らに開國論そのものを展開して行くのみの

凡そ變化のない場面にもかゝはらず、云ひ知れぬコクがあり、風趣があり、少しの倦怠もおぼえず聴き了るを得て、凡手ならざることを、つくづくかんじずにはゐられなかつた。もちろん、恐らく始めはこの藝風の正反對の花やかさのものであり、加ふるに美聲美音の鬼に金棒だつたのが、次第に淡々、水のごとき、この境地まで到達してしまつたのだらう。

「曾我兄弟」「五郎正宗」「川中島」「小栗判官」など、すべて、金襴物に長じてゐた。「小栗判官」は關東節の母胎たる説教節の上演曲目にもありながら、關西節にも昔は伊勢吉、小虎丸といろ／＼の人の採上げてゐるのがおもしろい。上古からいかに普ねく人口に膾炙してゐた人生悲話だつたかゞ想像できる。

例の「ニッポノホン音譜文句全集」に「小栗判官」の歌詞があるが、夫ある身の照手姫が勤めをしると云ふのを無下に斷るので「七十六人家内の奉公一人でせよと命令られ」馴れぬ「水汲の水の擔荷を擔」ぐ件り、いかにも美音哀音で語られたら哀しかつたらうと、左に抜書きして見る。

『前が下がれば後方が上がる、前が上がれば後下がる、バツタリ轉げて又起上がり、道は露やら涙やら、おいでなされし野中の清水、荷投げ捨てワツと泣き、悲惨の奉公ができようか、過ぎし夫のお目通り、この清水に身を投げて、死んで冥途で貞女を盡しませうと姫様が、西を眺めて掌を合はせ（下略）』
不熟稚拙の文句もあるだけに、それだけに感情が直接で、明るい／＼野原の中の井戸一つ、マザ／＼と目前に見ゆるおもひがするではないか。

初代 廣 澤 虎 吉

明治末年から大正へかけて、人間の上からも、藝の上からも、關西に於てこの人に頭の上がる者なかつたと云はれる。

この人の題材の豊富なりしは、明治末年篇の速記本の項を参照とされたい。十八番の「左甚五郎」全段が、今日、三代目虎吉に踏襲されてゐる。

二代目虎吉は、富士月子直營の寄席二葉館の支配人として、今尙浪花節のため奔

命してゐる。

都 小 圓 治

名古屋節であつた。

名古屋生れの縁故に依つてか、若き日、浪花亭駒吉をたよつて上京。東京に於て研鑽これ努めた。

美男で、上品の高座であり、今日、春野百合子につたへた「義士傳」は單なる得意の讀物と云ふ許りでなく、全盛時代の雲右衛門をして、名古屋には小圓治ありて義士を讀みにくいと嘆せしめた。以而、技量のほどが知れよう。

現在は、富士裾野に悠々自適してゐる。

京 山 幸 玉

この人も恭安齋の門下である。さうして、この人も東京で青年期の修業をしてゐ

る。そのころの東京で血みごろになつて闘つていつた人は、大てい彼地で相當の看板に達したと、今日も斯界の古老は語つてゐる。

嘗て九州に於て雲右衛門を聽いて感激し、己の興行を全く放棄して、廿日間と云ふものは雲右衛門のあと許り追ひ廻して聽いて歩いた。

つひに此が舞臺の目に留まり、

「君は一人前の藝人に成るぞ」

と旅費を貰つて漸く大阪へかへつて來た。

こんな逸話がつたへられてゐる。先年、北支で愛息を散華させた。

京山幸枝は、この幸玉門下の逸足である。

八 洲 東 天

京山幸枝は節讀みとして關西に珍しい三尺物を手がけてゐるが、この八洲東天は啖呵讀として鐵火な讀物を賞美されてゐる。

「天保水滸傳」を読み、「清水次郎長」を読み一心亭辰雄直傳の「三日月次郎吉」を読む。

しかも「俵屋玄蕃」なども立派にこなす。

硬軟兩様に秀でたる大看板である。

嘗て、道頓堀の酒場女から常に小遣錢をいたぶつて悦に入つてゐる少壯の映畫説明者があつたが、その女給にいつも多大の金品を興へてゐるのがじつに八洲東天であると分つたとき、同じ藝人であり乍ら女に金を散じるものもあり、その散じた金をば無下に絞り取る自分のごときもあり、つくづく我身が淺間しいと、一日、説明者は、筆者にかく慚愧悔恨して語つてゐた。何か東天と云ふ人の、おほごかな「姿」の半面を見せられたやうな話で、思ひ出すたび筆者は微笑ましい好意をおぼえずにはゐられない。

廣澤駒藏

關西は多く「節」の發達したところで、彼らは「節」のための「節」さへ讀む京山幸枝の修羅場など聴くがいい、關東では當然キビ／＼した啖呵で裂帛の氣合など表現してゐる亂刃的場面をも、へさあ來い來れと身構へて……』とすまして節でやつてゐる。

廣澤駒藏の滑稽物も亦その類ひで、啖呵の可笑しさでなく全くの節の可笑しさ。

あくまでユーモラスな節調のみで、すべての事件を發展させて行つてゐる。

今日、關西の中流にフラ／＼節の岡本玉治と云ふのがあつたが、じつに駒藏こそその以前の輕妙節の妙手と云へよう。

色の淺黒い穩やかな、至つて藝人らしからぬ風采で、しかも、巧まざる可笑味が滾々と涌きいでて來た。

異色であつた。

「玉川お芳」は極め附の讀物。

昭和へ入つて數年前、死んだとおもふ。

近世での大看板であつた。

同時に、忌はしいレプラ患者でもあつた。

この業病に冒されつつ友春は、高座をあきらめることができなかつた。

毎夜、張切つて彼は勤めた。勤めれば必らず巧く、必らず客殖え、必らず人氣も亦涌く許りであつた。

いよ／＼一心に高座を勵んだ。

だんだん慘ましく顔中が崩れて來た。

それでも高座を棄てなかつた。

つひに警察から嚴命あつて友春は出演不許可となり、漸く療養の生活に入つた。

さうして、空しく死んでいつた。

東京の落語界には嘗て盲目にして蹇^{あした}たる初代柳家小せんがあつた、大阪の落語界

にも同様の桂文三があつた、しかし乍らレプラ患者は餘りにも痛まし過ぎる。筆者はいまこの小傳を綴りつつも藤川友春のため一掬の涙なきを得ない。

「真田入城」など、得意としてゐた。

大正初年の浪花節拾遺

大正初年までの浪花節は、なか／＼の人氣があつた。それが中年から次第に凋落しだした。さうしたことを「大正年代篇」で、田邊尙雄氏の一文など引例して些か述べた。

偶々手許にこのほご數冊だけ入手した大正三年版の雑誌「うきよ」があり、それに前述の私の言葉を裏書するに足る、盛況なりし當時の浪曲界の聞書が誌されてゐるから轉載して見よう。とは云へ同じころの「講談雑誌」などには浪花節のナの字もなく、四流五流の曝露雑誌である「うきよ」に瀕々と浪曲記事のみいださるるこ

とも、このころの浪花節の社會的位置の凡そどの程度だつたかを物語るに足りよう。しかも、くどいやうであるが、このころの人たちの方が今日の人たちより低調なりに、いや低調なればこそぐんと浪花節的悲哀美をよく／＼把握してゐた矛盾をおもふとき、重而、感慨無量たらざるを得ない。

記事は「浪花節語りの生立」と云ふもので若かりし日の辰雄(服部伸)、先代樂遊、早川辰燕(敷島大藏)の寫眞が挿入されてをり、前々號から連載されてゐるものらしいが生憎それらの號は手許にない。

男子の部

桃中軒晴月(落語家)、芙蓉軒一鶴(伯圓の門下)、浪花^ベ右衛門(鉞力屋)、浪花東陽(大工)、林耕星(床屋)、浪花亭美洲(船橋の漁師)、春日亭清嬌(下駄屋職人)、春日亭清蝶(製本屋)、浪花家辰丸(横濱の巾着切り)、浪花家藏(車夫)、春日井文之助(湯屋の倅)、雲井^{馬馬}(山形の百姓)、富士見軒靜水(横須賀の職工)、戸川盛水(三味線小淺の弟)、吉川音丸(左官屋)、三河屋小圓車(車大工)、鼈甲齋雲龍(床屋の小

僧)、京山吾一(徳島縣××)、岡本鶴圓(綿打職人)、吉田一若(塗物屋の倅)、吉田美芳(塗物職人)、吉田奈良國(畑の番人)、吉山若光(岡山在××)、京山圓遊(隱亡燒)、京山圓吉(青物屋の倅)、京山圓奴(三下奴)、廣澤菊路(畑の小屋番)、廣澤菊水(藝妓屋の倅)、京山鱗昇(大和の緋職人)、東家小樂山(瓦屋の小僧)、桃中軒村雲(土工)、壽々木圓左衛門(油屋)、小林如炎(むきみや)、湊家小柳丸(桶屋)、東家市樂(八百屋小僧)、玉川勝右衛門(堀江の漁師)、篠田實(寫眞屋倅)、早川燕文 越後の百姓)、壽々喜亭米右衛門(むきみや)、石川亭小濱(初代小濱の手引)、小林三升(祭文の倅)。

女流の部

桃中軒女雲右衛門(寄席のお茶子)、吉田奈良女(淡路福良漁師の娘)、攝津辨天(伏見薪屋の娘、藝妓)、式部佐代子(カラクリ)、前田八重子(壽の養女にして妾腹)、菅原千鳥(由良漁師の娘)、吉田奈良子(船橋の藝者)、桃中軒團菊(上州前橋在馬子相手掛茶屋の娘)、浪花靜子(浪花家辰造の娘)、武道軒^ベ代(大工の娘)、吉田羽衣

(木戸番娘)。

三 味 線 の 部

戸川花助(縁日のろくろ首)、浪花亭操(女義太夫)、戸川小淺(淺吉、圓車、米造の三夫を経て現今愛樂の女房)、浪花亭道子(虎好、峰吉の二夫を経て現今重友の女房)。

たまにしか昔は浪花節と云ふものを聴かなかつた私だつた、が後になつて他からいろいろ教へられたことなどで、以上を列記した中にも感慨少からざる人々があり、一々それについて述べて見度いのであるが、茲では單に全文を紹介するだけにとどめておかう。但、この前身の曝露の仕方は餘りにも無教養で、多分にも「うきよ」式である。寫しとつてゐて幾度か呆れ、また幾度か噴飯してしまつた。

他に「浪花節總まくり」が連載されてゐて、京山若丸、先代樂遊、先代勝太郎、先代虎丸が月旦されてゐる。相當に當つたことを(深くはないが)書いてゐる。

投書欄では一心亭辰雄の關西公演を惜んで、ああ云ふ江戸藝は贅六には分るめえ

なご一ファンが氣焰を上げてゐる。以而、そのころの風潮が分らう。

第四章 昭和年代篇

廣 澤 虎 造

廣澤虎造は明治卅二年東京芝に生れ乍ら、關西に走り、先代廣澤虎吉の門に投じた。それ故、關東浪曲界に於て彼の前座二つ目の修業時代を知る者はない。虎造の嘗ての語り物に「左甚五郎」あるは、全くこの虎吉門下時代の遺品なのである。廿三歳、真打になつて歸京し、曲師たる現夫人を迎へたが、夫人の母親は吞氣家綾好とて滑稽讀の女流浪曲師であつた。この綾好が虎造出演の直前に登場して熱演すると、客は真打の虎造を聴かずしてみなかへつてしまつた。(尤もその頃の虎造の節調は單なる虎丸節のイミテーションに過ぎなかつたと云はれてゐる。)發奮勉勵した彼

は、先代虎丸調の明るさへ、配するに先代重松の感傷調を以而した。題材には「次郎長傳」「夕立勘五郎」等、伯山系のものを選んだ。

明るい感傷を有つ虎造節の誕生はここに約束されたのである。めき／＼彼は賣出した。勿論、賣出したと云つても市井の寄席真打としての人氣に過ぎなかつたのであるが、しかし今にしておもふ、虎造節はあの方か今日とは比較にならないほど優秀であつたことを。あのころの明るい悲哀感には董いろの味感があり、小説で云へば故池谷信三郎の作品を聯想させた。筆者許りかと思つてゐたら、金子光晴君も先日云はれたし、岩田專太郎畫伯のところへ往年のニットレコードを聴かれた和田芳恵君も云つてゐられた。安藤鶴夫君の知人にも同意見者がある由である。論より證據、往年のヒコキレコード、ニットレコードなどを聴いてほしい。それ以外の虎造レコードはみな近年の吹込に屬するから駄目である。

現下の虎造は、レコードに、浪曲映畫に、猿之助や前進座との提携に、自ら俳優となつての實演に、その名、全國的に歌はれ、例の「馬鹿は死なぶきや直らない」

なご殊に喧傳さるるに至つてゐる。此は本人にとつてたしかに一面の幸福ではあらうが、かの董いろの可憐な悲哀感は盡く失はれた、中途半端に間延びがし、スケイルが大きくなり、何よりイージーゴーイングになつてしまつた。蓋し、小味の哀しさ美しさが生命であつたこの人は、本人も思ひ及ばなかつたほどの出世をして、常に大劇場の大舞臺から呼びかけねばならなくなつた、め、肝腎のよさを放棄してしまつたのであるとおもふ。ただ、その巧緻であつた時代に於ても、輕妙の會話、よく石松は愉しめたが、つひに次郎長の貫録はなかつた。さう云ふ點、故伯山よりむしろ故伯治の藝風に近い。描寫のできないこともこの人の缺點で、いつぞや「一本刀士俵入」の駒形茂兵衛、空腹のときと、やがて腹一杯食事をして來たあとと、少しもちがつたところのなかつたには失望した。

此を要するに虎造今日の人氣は世間が優秀だつた時代のこの人をしらないことと、今日の浪花節の中では稀に見る輕快感の横溢にあるとおもふ。近來、こなれぬ新作物もやるけれど、やはり「次郎長」「夕立勘五郎」であらう。他に「雷電と八

角」「寛永三馬術」など。

二代目 玉川勝太郎

初代勝太郎門下の次郎から、二代目襲名するに及んで、めき／＼と演技に濡れを見せて來た。五月の大利根を見るやうな洋々たる節調である。嘗てのこの人はスケイルは大きかつたけれど、詩がなかつた、夢がなかつた。大正末年の關東節不流行の結果、合の子節に轉向してゐた時代など、殊にその感が深かつた。近年再び關東節に復するに至つて、豪放な中に一沫のセンチメンタリズムが加味さるるに至つた。そのとき筆者はかう呟いた、ああ、大利根にも一と雨、來た、と。

「天保水滸傳」を十八番とし、中でも平手造酒の駈付は、今日のところ、この人のほかにはない。

へ江戸は神田於玉ヶ池

千葉の道場で見るとも

今またここで見る月も

月に變りはないけれど

變り果てたる我が姿

世が世であれば水戸屋敷

殿が月見の宴とやら

心柄とは云ひ乍ら

今ちややくざの群に入り

用心棒とは何ごとぞ……

切々と月に哭く造酒が、やがて笹川村の喊聲を聴き、すがり付く尼妙齋を突放して表へ駈出す。あの一瞬の凄壯感は、なか／＼にいい。

一心亭辰雄を私淑してゐるこの人は、辰雄の殺陣の氣迫をまたよく擱んだ。外的でなしに、内的に擱んで、自家藥籠中のものとしてゐる。辰雄の殺陣は、この人の上に跡を垂れてゐると云つてよからう。

「次郎長傳」も、石松代參、勝五郎の義心等、虎造とは別個の師匠譲りのものを作る。虎造の次郎長と石松とは單なる輕快は會話のヤリトリに過ぎないが、この人の場合は用語がばくち打になつてゐる。次郎長が裏の大根畑へ出ると云ふも江戸ならぬ清水の景色が感じられるし、石松が大政に「内の親爺にも困るんだ」とこぼす邊りも、いかにも子分らしい『人情』が見られる。次郎長も大親分らしい貫録を見せるが、慾を云へば、やや石松が重過ぎるか。この點、虎造とは正に對蹠的存在でもある。

他に、「國定忠治」山形屋がある。「水滸傳」では蛇曾根村斬込と花會がある。「黃門記」の孝子幸助がある。

この人は讀書なごなか／＼やる癖に新作のどん／＼やれないことが一ばん缺點であるが、殊に、大家になつてからは一段と讀物が少くなつた。「慶安太平記」善達道中や忠彌召捕。「祝町の仇討」「清水定吉と五分玉お藤」せめて昔の讀物を復活してもらひたい。「次郎長」でも石松の用水堀があつたし、「水滸傳」でも棒祭があつた

はづである。岩松の唐丸籠の別れなごも、必らずやり得るものとおもふ。玉川勝太郎最後の精進として、これらの再生を切に望み度い。

浪花亭綾太郎

浪花亭綾太郎は盲人だけに、會話に退く手がない。吉右衛門張りの甲高い聲で攻めて攻めて攻め抜いて行く。あれが惜しいが、よよと月夜に號泣するやうなあの節廻しは得がたく美しい。十八番の「壺阪」もさることながら、私は小泉長三氏原作「は組小町」を採り度い。辰雄のとは又別な巧さがある。思ひ協つたお初夫婦が春風の日の日本橋堀留の二階で睦じく寄り添つて草双紙を見てゐる。階下から父親が呼ぶ。なか／＼お初は下りて來ない、夫に甘へて許りゐて。やがてその夫が不慮の死を遂げる。悲嘆のお初は二階に許り閉ぢ籠つてゐる。また階下から父親が呼ぶ。やっぱりお初は下りて來ない。が、今度の場合はすつかり己一人の身を持って扱つてしまつてゐる悲しさ寂しさ物足りなさのだ。目を泣き腫らしたお初の顔が、眞白く美

しい。それから夫の死のときにも醫者が來る。そして駄目だと云ふ。のちにお初の死ぬときも醫者が來る。そして、これ又、助からぬと云ふ。が、その醫者の死の宣告の下し方も亦、綾太郎は二種二様に演じ分けてゐる。甲がつよいため首をよく振り、又、齒をくひしはるが、さうした悲しい缺點を補つて餘りあるほど、この人の節は美しい。この人の會話の段取りはすばらしい。今日では數少い愉しめる浪花節の中の一人である。

この人、横濱市南太田町に生れ、九歳にして父を失ひ、按摩となつてながしてゐる内、浪花節のよさ面白さを知り、初代綾造の門に入った。

が、修業の辛さは言語に絶し、耐へ兼ねた彼は冬夜、淺草吾妻橋から投身しようとした。

偶々橋詰の交番所の巡查に助けられ、いろ／＼激勵された上、焼芋の馳走にまでなつた。

その後も綾太郎の受難は未だ／＼つゞき、十九歳にして恩師と死別。筆舌につく

しがたい千辛萬苦の末に、廿一歳のとき檜舞臺と云はれた淺草新惠比壽亭で初看板を上げたときは、嬉しさに樂屋で號泣してしまつたと云ふ。

綾太郎の「藝」の中には、今もその夜の號泣が、決してはなれてゐない。それがまた彼の節調に、こよなきいのちを與へてゐるものだとおもふ。

「天野屋」の河内守が利兵衛に自白を頼むその複雑な心理の段取り方。「有馬猫」の孝子與吉が蜆の荷を擔ぎ、有馬様の御門をくゞつてゆく肩のあたりへふりかゝる雪のいろ。みな、優れてゐる。「伊達騒動」「め組の喧嘩」「金比羅利生記」「義士傳」「おこん殺し」「佐倉義民傳」「曾我物語」「鹽原多助」演題は未だ無數にある。

「壺坂」の有名な歌詞は、誰の作か？

「妻は夫をいたはりつ、夫は妻を慕ひつつ、頃は六月中の頃、夏とはいへど片田舎、小田の早苗も青々と、蛙のなく聲いと涼し、名月や淺黄に銀の一つ紋、きくも涙の夫婦づれ、葉越しの月を拜みつつ、漸く迂る足曳山の狼谷……」

かうした文句であつたとおもふ。綾太郎歌ふとき六月の夜の微風が、しづかに聽

く者の頬を撫で渡るをおぼゆる。もう一つ、感嘆させられたこと、それは「鹽原多助」青の別れの左の件りである。

この人の「鹽原多助愛馬別れ」では、馬が嗚咽するところの節で、何か人間の泣くのはちがふ表現をしてゐる。が、ごこがさうだのか分らない。いろ／＼と考へて見て「聲上げて泣く」と云ふ節を「聲上げ」でワザと呼吸をいれ、アト一氣に「てなく」と歌つてゐるため、此が人間の悲嘆でなく、畜類の悲嘆をあらはしてゐるのだと云ふことが分つた。だつて、ごうやつて見ても「聲上げて」と切るか、「聲上げて泣く」まで一と呼吸にやつてしまふか、さう歌ひ度いところである。そこを殊更の「てなく」の異常表現は、綾太郎碎心のものであらう。感嘆したので、かきとめておく。

壽々木米若

「佐渡へ／＼と草木もなびくよ

佐渡はるよいか 住みよいか

唄でしられた佐渡ヶ島

よせては返す浪の音

立つはかもめか 群千鳥

濱の小岩に佇むは

若き男女の語り合ひ……

米若の聲名を一躍全国的ならしめた「佐渡情話」は、本多哲氏の作とおもふ。

新潟縣中蒲原郡曾野木村曾川と云ふところに生れた米若が、おけさ節を主題としたこの作品を採り上げたところに、成功の最大原因はあつたと云へよう。

郷里で農業に従事してゐたこの人、俄に浪花節を志して上京したは、一に、そのころ東京浪花神田組の幹部であつた二代目壽々木亭米造が伯父にあたつてゐたためである。

大正九年、伯父米造の門を叩いて彼は研鑽した。昭和三年秋には、アメリカ各地をも巡業した。一體、そのころから米若には、新作物にたいする一種の「カン」があつた。随分おびたゞしいレコード吹込をしてゐるが、「鑄かけ松」とか「辨天おさく」とか、青々園原作「寶を釣る男」とか、それらの中にはこの人としての作中の主人公の性格や人生觀にたいする立派な新解釋が施されてゐる。

しかも決して一人よがりの新解釋でない點がおもしろい。在來のものではそのころ「吉原百人斬」なども讀んでゐた。「乃木將軍」も讀んだ。「百人斬」では一部に、關東節を挿入してゐた。

「佐渡情話」以來の米若は、いよ／＼新作の世界へと突入していった。「鳥邊山心中」「七年後の佐渡情話」「米若と闇の女」など、すべてそのころの收獲である。さうして、やがて日支事變が勃發した。「婦人從軍歌」をはじめ、前線銃後の感激美談を、次々と彼は發表した。現在もその方面の開拓に、一意専心しつつある。

この人の節調は美しい。

歌謡曲的なる美しさ。大輪の、色とりどりのダリアの盛り花をでも見るの思ひがする。

が、その會話は、節調ほごには秀でてゐない。訛りもあるし、上流の令嬢の表現など、二た時代位前の新派の女形を見る感じである。樂燕を目して最高峰としてゐるこの人であるから次第に洗練されて行くであらうが、それよりこの人はもつともつと／＼會話を少くし、純粹の歌謡浪曲の世界へ入つて行かないものか。もつともつと三弦の手を豊富にし、複雑にし、音樂的效果を強調させて、歌から歌へと歌はせぬき度い。その意味では題材なども、もつと「詩」に富んだものもいい。「繪」に近いものもいい。

今後の「道」と信ずる。

木村友衛

先代重友、門下。横濱の人。

「河内山」「鹽原多助」「小金井小次郎」「稻妻お玉」「慶安太平記」など、ほゞ、師匠譲りのものが多い。近來は子母澤寛氏の「黒髮積」なども讀む。

この人の聲量は豊富である。豊富過ぎると云つていい。餘りに大音を張上げるため、折角の餘情がかき消されることすらあるから、である。年少私かに義太夫を習ひ、そこから何をか得ようとした彼とつたへられるが、中車擬ひの重いゆつたりとしたあの啖呵は、義太夫に胚胎してゐるかもしれない。「ウーム、ウーム」と力んだこの人の三味線の掛聲も、たしかに義太夫をおもはせるものがある。

このごろ、銃後物など演つてゐるが、これはどうもイタに付かない。臺本もつまらないが、いかなる名臺本をあてがつても、この人にはさうしたものは無意味の氣がされる。むしろ、舊作の歌詞へ次々と新粧を凝らしてゆく程度がいい。その點、玉川勝太郎の抱く「宿命」と似たものがある。軽いものゝ、不可ない點もよく似てゐる。

ただ一つ、あの大がりの重い節調であり乍ら、よく仄かな哀感をつたへるもの

に、「鹽原」の戸田邸別れがある。

後見送つて角右衛門、つけたる槍をバツタと落し、ゆるしてくれよこれ忤、これが町人百姓なら、お、我子か忤かと、云ひたいことも山々なれど、それでは義理が相立たぬ、泣いてかへるそちよりも、現在我子にあひ乍ら、大身の槍で追返す、親の心はいくばくぞ……』と云ふあすこである。あれは、なか／＼に悲哀溢るる。

ところで、先年、筆者は某劇場の樂屋に於て、この人の稽古を聽いてゐたが、餘り張らないで歌つてゐるそのときの節調には色も匂も艶もあり、ほれ／＼と打たれてしまつた。この人、師重友の晩年のごとく聲調失はれむとするときに、却つて稽古のときのやうなあの艶麗さが溢れて來るのではなからうか。

最後に、近來の少壯關東節の人々、最も特色たる哀々切々の味ひを失つたは、一に友衛節の影響とおもふ。友衛自身のやる場合にはラフではあるが一種の迫力も感じられるが、模倣者に至つては全くバカ聲を張上るのみで下らない。末廣友若を見

よ、二代目小柳丸を見よ、一ところの相模太郎のウレヒ節を見よ。容易に肯いてもらへようとおもふ。

此は、決して友衛の罪ではない。責任でもない。しかし、かの三遊亭圓遊が野幫間を主題とせる落語の、大いに世の中に迎へられたとき、三遊派の若手落語家は忽ち我も／＼と野幫間落語を模倣し、競演した。時の藝評家は、この現象を、偏に彼、圓遊の罪に歸してゐる。その意味に於てなら木村友衛にも尙且、一半の責任はあるとおもふ。

春日清吉

春日亭清吉門下。

最近、「亭」を廢して、春日となつた。

先年、雲月、虎造、米若、梅鶯らと大劇場へ出演したとき、その出來榮はこの人が第一等であり、聽衆にも亦最大級の受け方をしたとつたへられる。

「東京中で清鶴が一ばん巧い」

玉川勝太郎も常にさうたたへてゐる。

清鶴、若き日には仇なる關東節であつたと云はれるが、中年以後肥満した故か、元々ない節がさらに落ち、音階をはずすことさへある。

が、會話は巧い。

上手に心理を追つていつてさしぐまれさうになつて來たとき、スツと一とつぶし丈け歌ふから、悪聲でも聽者は胸が一杯になつてしまふ。

「藝」とはいたづらに美聲で歌ひまくるものではないと云ふことが此丈けでもよく分らう。

筆者、嘗てこの人の稽古に立合ひ、今日こそは泣くまいとおもひながらも、忽ち他愛なく泣かされてしまふのが常であつた。

それでゐて諧謔も巧い。

「三日月小僧」の千住の廓。凄慘なる復讐場面で、血刀提げた庄吉が女郎はみな

證文を卷いてやるからごこへでも行け、客も勘定はいらないと云ふ。それを聞いた一人の客が、「だから昨夜俺が前勘は止せと云つたんだ」と残念がる呼吸など頗る可笑しい。

所藏のレコード「平手造酒」の、造酒が千住の廓を素見すところでは、牛太郎が本物宛らに活躍すると、宿場女郎の荒んで美しい顔立ちが如實に目前に見えて來る、そのとき格子外では蟋蟀が肩させ裾させとなきつづけてゐるであらう。

「野狐三次」の木つ葉賣り、秋田屋。

「鼠小僧」、「大阪屋花鳥」、「加賀鳶」、「梅山大佐」、「祐天吉松」の飛鳥山。

これでもか／＼と迫つて來ては胸をしめ付け、つひ／＼ホロ／＼と泣かされる。師匠の清吉よりも、今ではサンチマンがたゆたで、濡れ色の美しさを見せて來てゐる。

春日井梅鶯は、嘗て天中軒如雲月を名乗つた一個、青年浪花節に過ぎなかつた。それを今日の大家たらしめたは、先々代加賀太夫の支配人たる駒井某の絶大なる努力としなければならぬ。雲月系統の節調で、「南部阪」はじめ義士傳や、「赤城子守唄」「残菊物語」の新作もある。

梅鶯の節調は大都市のファンには歡ばれない。レコードも東京に於てはさして賣れない。が、東北、北海道、北越方面の村々では、この人に及ぶ人氣のものなしと聞く。全く厭倒的な勢力である。

梅鶯は筒一杯に歌ふ。何らの變哲もない單調さで、只管に歌ふ。それが地方人にはいたく歡ばれるらしい。會話は拙劣に近いが、それも地方人にはさして問題でないらしい。

殊に滿面汗みづくになつて歌ふ彼であることが無上の好感を持たれてゐるやうである。背に汗するとも顔に汗かくを無上の恥とされてゐる古來からの藝通の戒めをおもふとき、筆者は茫然たらざるを得ない。

松 風 軒 榮 樂

先代寶集合榮樂門下でその二代目を襲つたところ、金子堅太郎閣下に松風軒の亭號を與へられた。

大正中年から聲量のあるに任せ、歌ひまくつたため、人氣高く、第一線に活躍した。

今尙、元老級に祀り上げられてゐる。

ある斯道の名人は人氣者時代の榮樂を、浪花節を好きになり出したころのお客様には、何より上手におもはれる人ですと評してゐる。

一般の聲名、高かつたことが思ひ知られる。

近來は流石にこの人なりに、あの取りすましたポーズもいたに付いて枯れて來た。東武藏は急迫して、この人は悠容として、同門丈けによく注意して聽いてゐる

と、全く同一のアテ節であることも面白い。

得意の演題に「伊賀水月」「村上喜剣」「俵屋玄蕃」がある。

東 武 藏

これ又先代寶集舎榮樂門下で、榮馬から東武藏を名乗る。

しかし、あの嚙んで吐き出すやうな節調は、全くの獨流である。「鬼傑の叫び(相馬大作)」「羽賀一心齋」「井伊直人」のごとき舊談あり、「磯打つ浪」「三千兩恨の證文」のごとき明治調の新派小説もある。「恨の證文」は圓朝の「英國孝子傳」である。新作に「忠犬ハチ公」がある。

才氣縦横であり、達者そのものでもあるが、この人には描寫がない。一應の達者さで眩惑されるが、藝道第一義の條件である人物情景の活寫に、心が配られてゐないことをおもふ。

陰影ニエアシズの不足はそこにあるのだ。

達者に任せ、喋り過ぎることも、却つて浮上る可き情景を妨げてゐるかもしれない。

東武藏への不満は、かかつてその一つにある。

二代目 天 中 軒 雲 月

最初の藝名を、藤原朝子。

先代雲月門下となつて、雲月嬢。

さうして、二代目を襲名した。

古典の演題に「文七元結」「玉菊燈籠」「村正改心録」「義士傳」があり、やゝ新しいところで「唐人お吉」がある。

近來は、「九段の母」とか、「鈴蘭の妻」とか「愛國草鞋」とか、尾崎士郎作「盧山の明月」とか、専ら事變物を取上げてゐる。

雲月と云へば、一口に七つの聲の持主と呼ばれる。

老若男女を使ひ分ける技巧をば、大いに讃嘆されてゐるのであるが、あの素人向の、技巧のための技巧は、藝道本來の心がけから云つては、どうであらうか。無駄なる努力ではなからうか

邪道であるときへ、筆者は云ひ度い。

「藝」とはものみな姿をありのままに寫し出し、さらにそれへ「美」の洗禮を與へるものであるが、あの雲月のやうな活寫はまことの活寫とは云はれまい。

淡々と素讀みにし、巧ますしてそこに、男を、女を、老を、若きを、クツキリと描き出す。それがまことの「藝」であらう。

天中軒雲月は今日の七つの聲を深く放棄してしまつたとき、あの無駄なる努力は漸く無駄でなくなり、内的に光芒を放つ。そのとき、はじめて彼女はほんたうの「藝」を見出すであらう。そこまで苦しんで到達することをのぞんでやまない。

俗流低調のお涙頂戴の時局便乗臺本も、いい加減にして棄てる可きだ。好んで雲月は西洋映畫許り見學してゐる由であるが、もし附焼刃でなく見學してゐるのなら、

やがて彼女自ら、七つの聲がイヤにならう。俗流臺本がイヤにならう。

切にそこまで來てほしいものである。(昭和十八年三月現在、再び雲月隱退の報せを耳にした。ほめられてゐるうちにちり度いと云ふのが大專の理由だとある)

東家樂浦・浪花亭愛吉

東家樂浦は、先代樂遊の弟、小樂遊の門下である。東家一門に於て故樂鴈以後の藝達者である。諧謔の節あり、憂愁のしらべあり、藝もなか／＼の本格である。「銚子の五郎藏」「紋三郎の秀」「祐天吉松」「魚屋本多」「大盃」「越後傳吉」「義士傳」など。殊に「紋三郎の秀」「大盃」は、清鶴、燕平のごとき達人が慄へ上がる出來榮と聞いてゐる。大方の再認識をのぞみ度い。

浪花亭愛吉は、初代愛造門下である。

「蘆屋道滿大内鑑」全段を有し、「五條橋」なども演る。また「村上喜劍」もやれば、「佐賀夜櫻」「次郎長傳」「豊臣昇進録」も演る。

關東節の約節を、この人ほど自在に使驅するものはない。もはや聲調衰へてはゐるが、得がたき關東節古調の忘れ形見である。古書展のごとく尊重していい。

港家華柳丸

港家華柳丸は、先代小柳丸の門下。小柳丸は名古屋節であつたが、この人は純關東節である。さしたるアテぶし（クラキマツクス節）のないが致命的に損であるが、キツカケの間の節尻には一種、趣深い哀調が尾を曳く。

先代ゞ友の董陶を受けたと聞くが、巧緻な江戸前の會話は、ゞ友譲りのものであらう。

絶唱を「小夜衣草紙」とする

殊に桔梗屋文助が己ゆるゑの小夜衣の自害を知り、貸し與へられた破れ傘をさして、しほしほと夏の真晝のざざ降りの仲之町へ。雨の滴が柄漏りをして、いくたび

か文助の顔をビトビト濡らす。廓の晝は、しんしんとさびしい。ああ、小夜衣は俺をうらんでゐたかなと文助がおもふ。「無禮者！」そのときだしぬけにかう怒鳴り付けられる。おごろいて目を上げると覆面の侍がグツト睨んで突立つてゐる。あはてて一禮して文助は歩き出す。時、華柳丸は聲を低めて、呟くやうに、^ハ鐘は上野か淺草か。さうして、小夜衣うかんで呉れよと云ふ節にかゝる。そこの何とも云へないいい呼吸。

生はんじやくの講釋師など、この巧さの前に愧死していいとおもふ。

高座のみてくれのわるいことが残念であるが、もつと尊重されていい存在である。

木村友忠

友衛と共に、先代重友門下の逸足である。重友の會話から、ふツと節へ移り行くあの呼吸を繼承してゐる唯一人である。

「豊臣昇臣録」「畔倉重四郎」「文七元結」「忍ぶの常吉」「小金井小次郎」など、重友系統のものが多し。「正太と安」（阿倍川の血煙り）も手がけてゐる。

嘗ては面白本位と云ふ、俗流迎合の讀口であつたが、近來、その節調にもはや古風な味はひが十二分に生じ、のこり少い關東節本來の味ひを存する尊い一人となりだして來た。

ウラ聲で一とツぶし張上げる調子、今も友忠にのこつてゐるや否や。昔はそこが滅法、喝采されたところであつた。

三代目 吉田 奈良丸

二代目奈良丸門下、一若。

そのころは花やか一方の奈良丸節で、才名を歌はれてゐた。

三代目襲名後は漸く師の平易なる奈良丸節へ燻しをかけ、さらに／＼澁くした藝境へと入つていつた。

偶々昨夕も大阪歌舞伎座中繼の「開城前の大石」（矢頭衛門七を中心に——）をラヂオで聞いたが澁い重味のある節調の中に、淡々たる悲愁も滲み、あくまで史傳的な大石が立派やかに登場して來る。お物見から城下を眺めての感懐の一と節も、仄かに哀しくていい。衛門七の心理を諷ふ節廻しも少年らしい中に流石にいまの雲月のやうなワザとらしさが無い。たゞ聞き終つたあと感じさせられたことはいかにもこの人が關西流に本格であり、まつたうでありそれだけに派手なあはつけな人氣と云ふものとはいよ／＼遠ざかつて行くだらうと云ふことだつた。この本格さの中にも一つ愉しいものが加はつたらとおもふけれどそれは望んでも無理だらう。本人は寧ろこのしづけさに安住してゐる度いのかもしれない。

師匠讓りの「義士傳」のほか、極め附の「勸進帳」がある。新作に「東郷盃」がある。坪内逍遙原作、坪内士行脚色「桐一葉」がある。嘗ては蘆花の「不如歸」もあつたかとおもふ。

隠然たる關西浪曲界の大御所である。

天光軒満月

佐賀縣の一村落に生れ、十三歳のとき學校の歸途、吉川家小圓と云ふ人をたよつて入門した。

此が満月の門出である。

その後、永いこと地方廻りをしてゐたが、十七歳大阪へ。天満國光席の前支配人に見出されて養子分となり、天満國光の名に象つて、天光軒満月を名乗つた。

「常陸丸」「乃木將軍」「花賣娘」「熊本籠城」、倭軀、よく満堂を壓するあの悲哀極まれる節調は、まことに異色のものであつた。「常陸丸」に於る軍旗を焼拂ふ一と節など、風の間にくく上りゆくときれくく黒煙り、マザマザ目に見ゆるの思ひされた。

その満月、數年前仆れて昔日の健康さなく、今や靜養をつづけてゐる。門人に、菊月あり、新進有望と目されてゐる。

梅中軒鶯童

鶯童は、幼にして素人浪曲家の人氣者たり、あるとき専門家の一團を率ゐて自ら座長に、某所へ出演したところ、初日は眞打を勤めてゐた彼が千秋樂にはなんと前座より不評となつてしまつた。此に於てか一念發起し、俄に規則的の修業を始め、克苦、よく今日の聲價を得た。

とは云へ、この人、終始、獨學ではあつた。

低唱微吟と云つたやうなしめやかな關西調で、アテぶしの節尻には、よよと取りすがつて咽び泣くやうな味な情趣がある。

「紀文」全段、「吉原百人斬」全段は、得意中の得意とされてゐる。他に「義士傳」「藤堂高虎」「氏郷と秀昭」「柳生二蓋笠」「河内十人斬」など。

能筆で、文章もよくする。

鶯童は、自分が浪花節に成つたればこそ、今日の成功を克ち得た、故に、自分の

子供はみな、浪花節にしてしまふのだと、豪語してゐる。

この考へ方がいかにも關西人の成功者らしくておもしろいではないか。

京 山 幸 枝

京山幸玉門下である。かうしと讀む。

演題も鐵火、肌合も亦極めて鐵火と聞く。關西に於る故小柳丸の位置であらう、藝も、人も――。

「大瓢箪會津の小鐵」とか「天保水滸傳花會」とか「安中草三郎」とか、關西人には珍しい白刃相躍る渡世人の愛憎世界のみを、好んで讀物としてゐる。

今日では鶯童とこの人以外、絶えて大看板の讀まない「河内十人斬」を得意とすることも珍しい。

明治の中世、河内はづれの一村落后、熊太郎、彌五郎の二青年が、裏切つた熊太郎の愛人一家十人を殺傷して、金剛山の山深く姿を隠す。この血沫れたる明治悲劇

の全貌を、幸枝は世にも陰慘な節調で説きおこして行く。

大阪と云ふ古い――都會の暗さ哀しさを、身一つに抱きしめてゐる、稀有なる市井的浪花節と云へよう。

宮 川 左 近

先代左近の門下である。

たしか九州の生れと聞いてゐるが、浪花節としての花やかな成長は、名古屋で見られた。

女流浪曲かとおもはれるやはらかい美しいなよ／＼とした節廻しで、それが見るからにおとなしやかな舞臺姿と相待つて異常の人氣を博した。賣出し時代は、先代雲月のごとく都々逸や博多節の餘興もやつたが、晩年はガツチリ演題と取組んでくひ下がると云ふ本格の情熱を示して來た。技、熟さむとして死んだのは惜しい。没年を昭和十三年であつたかとおぼえてゐる。人間も斯界、一、二の圓滿な人格者で

あつた。

「乃木將軍」「生ける悲哀」「誓ひの乳母車」など、専ら晩年は讀んでゐた。

富士月子

富山縣射水郡西高木、光惠寺と云ふ寺に生れ、十五歳、浪曲家たらむと上京した。

東京に於るこの人の修業は、全くの獨立で、單身、研究を重ねてゐる内、大正六年大阪親友派井上晴夢氏に認められて關西へ。彼地で普く關西浪曲を研究して自家のものとなし、今日の地位に昇るを得た。「義士傳」「天一坊」「越後騒動」「山内一豊の妻」「善惡二葉の松」「肉付面」「桂小五郎」など。

近來は一心亭辰雄（服部伸）に傾倒し「團十郎と馬の脚」など、口授されてゐるが、辰雄のよさを知る人だけあつて會話はなかくに洗練され、「妹よ母を宥せ」とか題したる父歸るの焼直しの如きもの上演の際も、愚臺本を補つて餘りある出來榮

を見せ、空一杯に天の河ながるる山村夜景を、心憎いまでに描き出してゐた。

春野百合子

若き日の美貌は、女流浪曲家をつうじて第一のものであつた。

吉田大和丞一門と成り、「義士傳」は名古屋の都小圓治に親しく口授された。

この人は達者である。

達者過ぎると云つていい。

東武藏に於るとき、ひた押しに押しに行く達者なものはたしかにかんじられるが、餘情がない。

人物情景の活寫もない。

その點が、物足りないといふと云へよう。

嘗て百合子、「正宗孝子傳」で繼母お秋が五郎を打擲するに、江戸つ子の勇み肌でもあるかのやう、ブーツと拳骨へ息を吐きかけて撲つた。あれは困つたとある先

輩が語つてゐたが、正にそのやうな無頓着さが、餘情を乏しくさせてゐるものと云へよう。

「金比羅利生記」「馬場三郎兵衛」「お歌三平」「頼朝の戀」など、得意の讀物に數へられる。

・ 酒 井 雲

故桃中軒雲右衛門の末弟子。岐阜縣長良町に生れた。嘗て雲右衛門に従つて巡業中、心身鍛練のためと冬夜、山形の宿に於ては廊下へ濡蓐敷を敷きその上へと座らされた。此の荒修業が後年、「文藝浪曲」を樹立せむとして成らず、薙をテーブル掛の代用にしてまで開演した苦難時代、いか許り役に立つたかしのれないと雲、自ら語つてゐる。「本能寺」「駕籠幽霊」「大谷刑部」「小猿七之助」「沓掛時次郎」「景清」など。浪花節の最後の「丁ど時間となりました」を廢し、例へば「男、沓掛時次郎」と云ふ風な上品な末尾としたは、雲が元祖ではなからうか。

雲節に端を發する一流の豪宕な調ではあるが、暗く悲しく囁く可きところも聲量に任せて筒一杯張上げるのは採らない。「本能寺」に於て舞臺の隅々まで走り廻り、大仰な柱卷の見得をしたり、「大谷刑部」に於て照明、扮装の力を借りたりするあくどい演出法も、極めて邪道と云はねばなるまい。

宮 川 松 安

關西浪曲界に於て、今日も人格者と云ふと、直ちにこの人の名前を聞く。

まことにその節調も人格者の名に反かす、謹嚴そのものである。上品そのものである。

しかし世の中は難しいもので、それだけにまた少しも愉しさが無い。トボンとしたくつろぎがない。いつも千疊敷の大廣間で、襟を正して長上の謠曲か何かを拜聽させられてゐるかんじである。

が、近親相連つて安心して聽ける浪花節。

さう云ふ意味では、正に宮川松安こそ關西切つての第一人者と云はねばなるまい。

「義士傳」をいろ／＼讀むほかに、「浮田秀家」などの史傳物も得意としてゐる。昭和初年には「明治大帝」と題した巨篇を、ピアノ伴奏によつて上演すると奮命してゐた。ここにも松安の謹嚴さが見られる。

東寶名人會で漫談家井口靜波が例の東北辯のズー／＼の浪花節を演つて笑はせたとき、あとへ上がった故重友は、「あれを私の門人にしようとおもふがどうしてなりません」と云つてさらに笑はせたが、その、ち靜波がまた東寶へ出演して此を演つたとき偶々一座して聽いてゐた松安は、「いまごさあのやうな浪曲師はおめへんやろ」と大眞面目で抗議を申込んで、いたく靜波を困らせてゐた。いかにも重友と松安と、兩者の藝風、人格が如實にあらはされてゐる話ではないか。

秋 水・秋 齋・小 圓

二代目日吉川秋水、秋齋、二代目京山小圓の關西節は、關東節の浪花亭とか木村とか玉川にあたる極めて庶民的な市井の浪花節だと云ふ氣がしみじみとされる。

小圓と云ふ人、先代は義太夫のやれた人として歌ひ尻がガクンと低く下がり、しづういきんで歌つてゐるやうな暗い重いふしで親しめなかつたが、今度の小圓は、それより藝格はズツと落ちるのだらうが、私には比較にならないほど親しめる。「櫻川五郎藏」「佐倉義民傳」など、専賣である。秋水、秋齋は先代以來のお家物を、飄々とやつてゐる。

軒低く、家の中暗く、街々に蝙蝠がヒラヒラとんで、地藏盆の晩には路次々々で長屋の人たちが三味線を弾き、歌ひ、踊る。あの十年十五年前の上方の街裏の姿が、いしくも秋水や小圓にはマザマザとのこつてゐる。それらの文化の活形見だつた上方落語の殆んどが埒もなき漫才に絶滅されてしまつたこのごろ、筆者はこれらの人々の浪花節を限りなく尊いものにおもはずにはゐられない。去にし大阪の街の姿として、二どとは返らない昔の上方の複製版畫として。

新人その他

このごろの人々——と云つても次代を背負ひさうな——についてかくことが、何だか、いやな私です。そんなに取つ組んで論あけつらふに足る若手の浪花節なんか……さう云ふ感じ許りで一ぱいいます。

ごうか、思ひもかけないところから、思ひもかけない大才が現れてもらひたい。コケおどかしのはもう澤山です。

もつと關東節の、ほんたうの「いのち」に徹して、尙且いまの世の何かをはらんでゐる人の出現こそ俟ちたい。

手許の番附を見て僅に舊幹部と云ふところの虎一丸だの、重浦だの、愛吉だの、愛造だの、越造だの、松弘だのと云ふ、例へば震災で焼けのこつた麻布あたりの裏町の屋並のやうな古さなつかしさをもつた僅にこれらの人たちのことをかんがへる

と、佗びしいけれどこの人たちには何か仇な「聲」こゑ「節」ふしがあつた。もしくは、昔ながらの「會談」たんかがあつた。さうおもはれます。

この上の現役の寄席讀では、綾太郎、清鶴、友忠、燕平、松太郎、伯猿、樂浦、華柳丸、重行とかぞへるよりないでせう。女流の華千代は關西調ゆゑ、問題が別です。重行なんか、何年かぶりでの間一寸きいたら重勝のわるい方を真似て中江兆民も、谷干城も、「てめえ、俺」ですが、永年、叩いてゐるから、一種、チャチなりに古い家作りの「家」だと云ふ氣は、します。頭山滿翁の傳記は、いけません。彼が翁に心酔し切つてしまつてをり、たゞ只管に恐入つてゐて勝手な自由な演出ができないからです。翁の一家であるとか云ふ（恐らく創作にちかひものだらうが）頭山平馬の何席かゞ段違ひにおもしろい。此だの「四年七日」と云ふ横濱の探偵物など明治味如實で一ばんいいものだらう。小生の舊作「お吉」「花井お梅」などは節は哀切だが、てんで人物がだせてゐないで冷汗物に候。お梅など、本人が一流の藝者の生活など見たこともないのだから、場末の不見轉然たるのがあらはれて、ごう

にも恐れ入谷です。伯猿なんか、あの「聲」なりに一つの愛嬌があるのだから、へんに逃げないで、多少の失敗を平氣でまつたうに正面からかゝつていつてみたらどうなのでせう。妙に、話を説明的にトン／＼運んで、逃げてしまつて興ざめる。さう云へばこの伯猿を、もつと小味に四つに組む活き方をしてゐるのが、三門博とか云ふ人ではないのでせうか、ラヂオのほか聴かないので何とも云へませんけれど。「唄入観音經」と云ふ故南窓などの講釋種が大當りで、なか／＼の人氣者らしい。人氣者によくある大味でなく、合の子節の小味な哀調であることは珍とするに足るかもしれません。あとは本人の勉強次第でせう。訛りも直して貰ひ度い、讀物が讀物だけに。

重友が出来、虎丸ができたが、落膽しました。虎丸は問題外として、重友がなせ太棹をひくか。近來は（前にもかきました）關西の秋齋あたりでも關東節全盛で高調子にしてゐるのに、それを義太夫の三味線を起用するとは。時代錯誤にも程があります。浦太郎と云ふ人が東劇を一人であけたり、大會へでたりしましたが、評

判はごうでしたらうか。押出しが兄ちゃんみたいだが、腕は師匠樂浦仕込でたしかだし、しどろ講釋場へも勉強に來てゐる、聲も新内調で仇にできてゐる。腹さへしつかりして來れば兄ちゃんなりにヒレがついて來て、案外、一ばん關東節らしい關東節はこの人によつて繼承されるかもしれません。現に國民浪曲「海の系圖」など關東節の悲哀美を失はず國民浪曲であり得たのは瞠目です。

若衛と云ふ人は柄もよく、勉強もしてゐるが、師匠の友衛のあの太い節を受け繼ぐ人ではありません。殊に、女を主人公としたものに牙えがある以上、むしろ綾太郎をとりいれる可きでせう。それと現在もつかつてゐる關西節を適宜に取捨し、そこから「己」を生む可きでせう。友衛節は終生この人には不要のものとおもはれません。品許り好くしてゐるのも浦太郎を學びて反省す可し。

二代重松が、辰雄譲りの「中山安兵衛」へ、實父重勝の飄々とした味が加つて來、この間のラヂオなど、大そう可笑しく聴けました。この人の節は鼻へかゝるのが氣になるし、凡そ美聲とは反對なのですが、小音惡聲をいかに上手に利かせた

か。さう云ふ才物は古今の藝界には多々あつたでせう。この人、今後のめざす可き苦闘一路は、たゞ／＼そこにあると云へませう。

二代重正も小柳も、先代をおもはず節があつてなつかしく、だのに會話たんかになると、てんで老弱遠近が持ち切れない。此は重松とは逆に、話術の方をみっちり勵む可きであらう。

相模太郎は、明るい滑稽読みです。言葉のギャグより節啖呵のギャグに妙味があるから、あくまでこの様式を彫り下ぐ可きです。餘り浪曲劇などやり度がないで愛樂時代からの「天人お駒」のごときあの妙味をさらに／＼勉強す可きだらう。この人も、小生の舊作「灰神樂道中」その他を演つてゐるが、不熟でない。おかめは雲月のやうに聲帯模寫でなくて人物クツキリと滲みいで、たしかに天才にちかいが、一步まちがふと、ひどい田舎藝に轉落しさうで、棘然たるものをかんずる。いい指導者ができてゐて呉れたらばいいとおもひます。鈴木照子をもう數年聴きません。ごんな成長(?)をしてゐますか。

私は一體、ある種の人たちのやうに徒らに大音許り張上げて人氣を煽つてゐる人、またそこへゆかむとしてゐる人々を少しも買ひませんので、多少でもいま目に付き、耳にのこる人々を……とかぞへると、先づこんなところですよ。

誰か意外なところから大才いでよ。
叫びたくなる所以です。——純關東節に目安を置く私ゆゑ、このごろの番附を見てゐると、齒の抜けたやうなさびしさをかんじずにはゐられません。

あなたは、私とはもつと別の、自由な見地からこの社會を眺めておいでのこととおもひます。關西では小圓嬢など賣出してゐる由ですね。お目もじのせつ御指示を得たいとおもひます。先づは。——この一文、水野草庵子君へ——

戦争と浪花節

附・浪曲作家のことども

日清戦争は美當一調を生み、日露戦争後、武士道鼓吹の名に桃中軒雲右衛門擡頭し、その系列より生れた東家樂燕は時局浪曲を専らとして今日に至り、尙且、大元老の雄位を占據しつづけてゐる。まことに大戦争の度毎に、社會的人氣を高潮させて行く浪花節ではあると云へる。(戦争のたび人氣の上がるものにかの安來節があり、今次の戦時下にも十年振りで安來節はまた復活進出して來てゐるが、この方は浪花節の場合とは全く別な原因からで、寧ろ時代空氣が盡く硬化してゐるため、反動的にああした娘子軍の嬌聲など求め度がる心理に據るものだらうとおもはれる)

大東亞戦争勃發當時、浪花節はある一部から『たゝかひの歌』の名稱を稱へられだしたが、この名稱は普ねく流行らないうち廢れてしまつた。

それに先立つ支那事變下の昭和十五年から十六年春へかけては、文壇人を動員して愛國浪曲の原作が提供された。多くの文壇人が此に參與し、國家總力戦への御奉公の一分野として、それらの原作を浪曲家に與へてやつたのである。

蓋し浪曲界には未曾有の文化的な出來事と云つていい。その愛國浪曲集はやがて出版され、原作集の方も殆んど同時に出版されたが、長谷川伸、長田幹彦、白井喬二、久米正雄、藤森成吉、武田麟太郎、その他の諸家の原作で、脚色作詞はそのころの浪曲作家以外の新人が此に當り、名儀は長谷川伸、長田幹彦共同脚色と云ふことになつてゐた。そのときの浪曲作品についての私の小感がノートしてあるから、誌して見よう。

『新體制下の日本は、文壇の先輩たちを動員して、愛國浪曲の原作を提供せしめた。さうして、その脚色は、在來の浪曲作家では手法がマンネリズムになるからとて、ことごとく無名の新人を起用した。双手を舉げて私は同感賛成であるとおもつた。ところがいざ出來て來た臺本を見るとどうだらう。武田麟太郎氏原作 天下の糸平 が玉川勝太郎宛に廻つて來たが、作詞は先年、筆者が玉川節にあてはめて書いてゐる文句を全く下手に追隨してゐるのみである。此なら未だしも在來の作者を起用しておいた方が、もう少し巧いだけでも氣が利いてゐる。久米正雄氏は富士月

子用として、「血を嗣ぐもの」を自ら歌詞まで製作されてゐる。此は大へんよいことであるし、流石に手練てだれの作詞であるが、たゞ會話でやらなければ絶対に効果のないところを歌詞にされたり、歌詞と歌詞との間に、當然一と言あるべき會話の排除してゐたりする遺憾があつた。(下略)』

要するに作品の出來榮はこの程度のものだつたし、演出効果の方は淺草松竹座その他に於てこの發表會があつたとき、代る／＼に樂燕、米若、友衛、鶯童、勝太郎などが新作を發表し、つゞいて虎造がまた「函館碧血碑」(長谷川伸先生原作)を讀まうとしたら、忽ち客席に聲あり、「頼むから森の石松演つて呉れッ!」

——要路の人々はおうした點にもつと／＼留意し、下位上達の實を擧げて、もつと／＼衆が愉しめて、尙且、プラスできる演藝の提供を考へてやらなければいけないとおもふ。嘗て溼卑なりとて盆踊を嚴禁した結果が、左傾青年を氾濫させた例もある。一見マイナスと見えてじつはプラスのもの、プラスと見えてじつは逆効果の

もの、世の中には随分少くないことを、こゝらでよく／＼考へて貰はねばならない。愛國浪曲の文壇人原作提供のことは第二第三と續々行はれる可きに聞いてゐたが、なせかそのまゝになつてしまつた。詳しい理由は知らない、怯げずにこの企畫もたび／＼繰返していつたなら、しまひには一つや二つは名實共に秀れたものが誕生し、發展し、完成し、そこから浪花節の新風が吹きそめて來たかもしれない。そも／＼新作と云ふものが百篇生んで僅に一篇か二篇、後世にのこればそれで事足りる運命のものなのであるから。遺憾におもふ。

この愛國浪曲の企畫に參與した松澤太平と云ふ人が、目下各方面の文化人を戴いて浪曲向上會を興して、いろ／＼と仕事をしてゐる。先日、林伯猿君にあつたときこの會の内容を質ねたら、自分は加盟してゐるが他に浪曲人は餘り入つてゐないと答へてゐた。松澤と云ふ人は故北原白秋氏のマネージャーで、廣津和郎氏夫人の令弟と聞くから定めし文壇方面には通曉してゐられるのだらうが、同様に浪花節にも亦、多年傾倒されてゐたのだらうか。嘗て重松なり重友なり初代勝太郎なり先代樂

遊なりを、それからそれと追駈け追々廻して、木戸錢を先拂はれた體驗があるのかしら。いまの牧野吉晴氏のごとき、嘗ての畫家時代には繪絹を質において木村重浦を聴きにいつたら、づぼらの重浦が僅か十分位しか讀まない。憤然と高座へ躍り上がった。同氏は率直に繪絹質入の一件を吐露して文句を云つたら、すつかり恐縮し且つ感激した重浦は、改めて卅分以上、一時間ちかくも熱演した、と。私は松澤氏とは未見であるが、浪曲界を左右する以上、少くも先づ過去に於てこの程度の浪曲愛の體驗者ではあり度いとおもつてゐる。恐らくはさうであらうやう、同氏のため望んでやまないものである。

この向上會の後援で、近時、各圓盤會社は總が、りで「大東亞戰特輯」の圓盤を、順次賣りだしてゐる。大東亞戰に主材したものを各社専屬の人々がそれ／＼讀んで、何枚かを一と組づつに輯を追ふて發賣して行くのであるが、このやうな總力企畫は在來浪曲界圓盤界に絶えてなかつたところだつた。一々の出來榮は未だしらないが、企畫としては空前の時局下なればこそその豪華版と云つてよからう。

浪曲號飛行機の獻金興行も盛大に昨年は催された。昭和十八年七月現在、この廿三日の海の記念日のためには海事思想普及を主旨とした新作の海洋浪曲大會が八月十日、大日本海洋聯盟主催で東寶大劇場に開催される、廣く浪曲作家協會に呼びかけて新作してもらつた結果の入選三作の「海の少年（室町京之助作）」が米若に、「北洋へ行く男達」（齋藤石五郎作）が虎造に、「恩愛怒濤譜」（松本英一作）が雲によつて封切口演される。他に中川明德作「燈臺を守る人々」は鶯童此を擔任するらしい。このやうな愛國的企畫は今後も續々と催され、昭和浪曲史を多彩のものとするだらう。

また藝能界各方面の銅像應召に負けじと、浪曲界でも品川妙國寺境内の桃中軒雲右衛門の銅像が、進んで獻納することゝなつた。嘗て生前、己の銅像を自家の庭へ造らせておいた雲右衛門はやがて生活窮迫と共に此を賣却してしまつた。（生前、自分の銅像を自家の庭へ立てさせるところも、すぐまた困つて賣つてしまつたところもいかにも雲右衛門らしいではないか！）轉々してそれが早稻田鶴卷町の古道具

屋の店頭飾られてゐたものを、たしか東家樂燕（津田清美だつたかもしれない）が通りかゝつて買戻し、更めて妙國寺境内へ建てたものなのだつた。（この妙國寺で偶々松崎天民が葬儀が営まれたことも因縁だつたとおもふ）

次に他の藝能界と同じく近時國民浪曲賞の企も設けられ、それ／＼参加することとなつてゐて、今春は萩原四朗作「月と老僧（壽々木米若）」が一等を克ち得たが、このときの賞金が作者萩原四朗より米若の方が多額なのはいけないとおもふ。由來、一流畫家にも匹敵する多収入のものが浪曲第一流人である。已に平常さうした多額の収入ある以上、せめてかゝる文化的な企のとき位は作者の方に先づ多額の賞金の方を譲る可きであるとおもふがどうだらう。但、その／＼ちその萩原四朗と同じ米若のために執筆した建艦もの、「佐渡の神木（？）」とか云ふ圓盤の廣告文に「椿咲く夢の島」とあるのは許しがたい。それは佐渡ヶ島にも椿の木はあるにはあるだらうが、先づ「椿咲く夢の島」の語は斷じて伊豆大島以外には使ふ可きでなからう。この廣告文、作者自らがかいたかどうか詳にしないが、もしさうであるとしたら、だから作者の方が賞金が安いのだとお上から嗤はれても仕方がなささうである。

戦時下浪曲界の特殊な行事は昭和十八年七月現在迄のところでは先づ／＼以上だらう。

次いで今度は浪曲作家について述べ度い。此にも嘗て私のしたゝめた一文があるからさしづめ引用し、適宜にそれへ加筆して行くこととしよう。『』のところはすべて舊稿と知つてもらひ庭い。

昭和四、五年以後、圓盤の普及と共に、漸くに浪曲作家が擡頭して來た。私の初作の發賣も亦、昭和五年だつた。それ迄は浪曲臺本の執筆など文壇にも藝能的にも汚辱そのものだつたから、もし稀にかく人があつても匿名、もしくは全く名をださずにかいてゐる場合が多かつた。雲右衛門の場合、奈良丸の場合は例外としていや、そのころ始めてかきだした私にしても、いくら關東節が好きになつてゐてもか

りにあれほどに世を拗ねてゐなかつたならあハッキリとは本名をださなかつたらう。傷春失意のどん底だつた當時の私は、乙^{おつ}う上品振つて片附けてゐる文壇や世間が無暗に腹立たしく、他をも身をも嘲りつくすやうな心持ちで、あへて本名を名乗つてかいたものであることをいまここに白状しておく。かく以上は關西節はいや、あのやるせない美しい節廻しの關東節を、詩のやうな言葉で諷はせて見度いと、そのころ歌謡曲（と云ふ言葉は未だなかつたが）の専屬作家として入社してゐたニットレコードへはじめて執筆したのだつた。本多哲君などは、浪曲作家たる以前に已にインテリ浪曲家として世に打つてでてゐたのだから、當然もうそのころかいてゐたことだらうが、中央都市でハッキリ作者と名乗りを上げてゐるものは未だ皆目なかつた。私の記憶に誤りなくんば僅に水野草庵子君、この年か、この翌年、コロムビアをつうじて作品を發表しだした位のものだつたとおもふ。それにしてもそのときからつひ最近までの浪曲作家陣と云ふものは、ハッキリと云はせて貰ふなら、じつに質的に内容的に貧困至極のものだつた。

『私はここ七、八年、浪花節の臺本を書く人たちが頓に殖えて來たのでその作家の多くに交つて見て、太しく筆者は、失望を感じた。本多哲氏は嘗てインテリの浪曲家佛惡兵衛として鳴らした練達の士であり、畑喜代司氏には譯詩その他の文學的作品があり、水野草庵子氏は講談落語邦樂萬般に精通してゐる。故にそれ／＼その書かれるところにも見る可きものが少くないが、他はどうであらう。

萩原四朗など、云ふ人の作品もタイトルの附け方は随一であり、俗流には迎へられてゐるが全く低調の新派大悲劇的所産である。それにしても前記三家以外の多くの作家の貧困さは浪花節以外何もしらないと云ふことである。どうかすると、その浪花節も果から果の場末の寄席まで木戸錢を拂つて追駈け廻したなどの經驗のない人すらある。もしくはラヂオやレコード丈でしか浪花節を聞いたことのないなどと云ふ人がある。そして、ただ低俗のお涙頂戴作品許りを得々と提供してゐる。亂暴千萬である』

流石に森田たま氏は隨筆「貞女」の中の一節でラヂオの浪花節を聴き、『きいてゐるうちは面白かつたが、そのあと味は何れほろりと胸がせまるやうで、ひどく消極的な氣持であつた。(中略)私は浪花節といふものは、もつと勇ましいものかとおもつてゐたが、まことに豫想外の心地がしたのである』とかいてゐられるがこの程度にでも浪花節の哀切を發見してゐる浪曲作者が何人あるだらうか。尤もたま氏の場合、であるからいけないと云ふ論旨なのであるけれども。ところで餘談であるが、いまおもひだしたからかいておく。歌詞の最末節のタタミコミを廢して琵琶歌のごとく『いづこの果へいそぐらむ』と云ふ風に重ねる手法は昭和八、九年ごろ秩父重剛君の創案にかゝつたものと許りおもつてゐたら、大正初年發賣の日蓄、東家樂燕が「木村、徳田兩中尉」には已にこのテクニクの用ゐられてゐたことが、このほど分明した。即ち同君の功勞はこの手法の再起用と云ふところにあるのだらう。

『浪曲作家の質的貧困を見て私はおもつた。この程度のものなら、在來の新派浪曲「磯打つ浪」や「梅山大佐」や「又意外」で充分である。又、その作者の中には「先生」と呼ばねば「ハイ」と返事をしないのがある。同業者を訪ねて「私が浪曲作家の中では一で、君が二だ。しかしこの一と二の距離は大きいですぞ」と自ら云つた男も亦あると聞く。今や浪曲家たちは雲右衛門のイミテーションたる徒らに尊大振る惡趣味から脱皮して、日一日と文化的な人格を築き上げて行かうとしてゐる。しかるに作家側の方には凡そ誇大妄想狂的な手合が多いのは滑稽千萬である。第一、浪花節のどこがいいか、どこが悪いか、どこが美しいか、どこに涙が滲んでゐるか。それらを理論的に把握してもゐず、従つて斯道の新人を満足に指導してやることも出来ない、さう云ふ連中が幾十、幾百人ゐたところで、何の他足にもなりはしない。よろしく此は新鋭大衆作家の中の同好の士が進んでその作品提供に當り、丁度、明治の劇界へ岡本綺堂、岡鬼太郎、松居松葉、山崎紫紅氏らが乗込んで

いつて在來の竹柴某一派を一掃してしまつたやうな運動を試みる可きであらう。

従つて昭和初頭、私のごときいくら自棄の果てとは云へ、はじめて關東節の哀調に詩を感じたころには多少なりともそれらの世界へ新色彩を注入した市井人情の作品を興へ度いと、若干の情熱も感じてゐたのだつたが、漸く浪花節作家の輩出多きを見るに及んで、ふつ／＼私は執筆がいやになつてしまつた。作家諸君の大半は前記のごとく低調であり、圓盤會社など此を遇することも亦太だ薄い。二流三流の流行歌作家より、さらに一、二段、下位に置いてゐる。ことごとく私は愛想を盡かして、小説作品への精進、日に夜に激しくなると共に、全くこの社會から御免蒙つてしまつたのだつた。

それにしてもこのほど讀んだ、小宮豊隆氏の「演劇評論」大正三年版では、當時の劇場專屬作者の覺醒を促し、今日の座附作者は藝術家でもなく、職人でもないから、ごちらかにしてしまはなければいけない。しかし『劇場當事者が座附作者をもつと藝術家扱ひすると云ふことは、今の座附作者を止めさせて仕舞ふと云ふことでは

ある』と云つてゐられるが、此を今日の浪花節作者の大半に比べて、當らずと云へども遠からずの感が深い。いづれにもせよ、今後の浪花節臺本は文學ある人々の手に委ねられなければ、最後の向上、發展は見られない。それは宛かも今日の大衆文學の發展経路と全く同様であると思へばいい。』

この小感をしたゝめてからまた、二、三年の月日がそこにながれてしまつた、中に、先生と云はなければ返事をしない奇妙な作家のことをかいてゐるけれど、このほど吉井勇先生の「歌境心境」の中の「博多の古寫眞」を見て私は、瞠目しないわけにはゆかなかつた。

それは吉井先生が廿一、二のとき白秋、杵太郎、平野萬里氏、それに與謝野寛氏らと九州旅行に赴かれたときの記念寫眞の解説的懷古文なのであるが、その一節には實に次のやうなところがかゝれてあつたからである。

『記憶に残つてゐるのは(中略)その夜博多灣に舟を泛べた時、得意の浪花節を

美音で一席聴かせて呉れた、やはり白秋君と並んで立つてゐる長髪の壯漢××紅秋君などであるか、××君は一時支那浪人の頭目として時めいてゐたけれども、今では浪花節の作詞者として、○○○○とともに各地を巡業して歩いてゐると云ふことを、これも今度の旅で誰からか聞いた』

××も○○○○も憚つて勝手に私が訂してしまつたのであるが。なんとこの××紅秋氏が、ごうもその先生と云へば返事をする作者らしいことなのである。とする今日××紅秋氏の境涯は當時に比べて決して榮達と云へない許りか、餘りにも太しい落魄である。在來私は他にも未だいろ／＼とこの人の誇大妄想的言動を耳にしてただ不快に感じてゐたのだつたが、もし先生の描かれてゐる紅秋氏と同一人であるとしたらば、氏が往時の自己を振返つて見るときある程度の自棄的な言動は當然至極だらうと考へられる。何だか私は人生の無常面をマザ／＼と見せられたやうな氣がして、暫くは暗澹としてしまつたことが仕方がなかつた。紅秋氏の加餐を祈るとさへ切に云ひ度い心持ちにさせられたことがほんたうだつた。

閑話休題——それにしても近年の浪曲作家陣は殖えに殖えて、今回の海洋浪曲の作家の顔ぶれを見ても前述の齋藤石五郎と云ふ人をはじめ、最上三郎、九十九鯨太、房前智光、河内芳之輔氏らの新人の名が見られる。いかなる出身、作風の人たちか知らないが、ごうか私の前言を取消させるほどの快作名作を發表され、即刻に浪曲界を新天地として頂き度いことである。

先日、久々で大患中の私を見舞に見えた玉川勝太郎君は、屢々雲月作品を草してゐた中川明德氏を知識もあり、將來ある作家とほめてゐた。注目し度いとおもふ。また昭和十八年七月二日の東京新聞は、情報局で近く浪曲作家協議會を開き、浪曲家の附隨的存在から脱却の懇談をすると報道してゐた。要は「質」、人間と作品との「質」の問題が自ら此を解決するだらう。さうあらむ日の近からむことを昔日の浪曲作家の一人として心から私は祈つてやまない。

浪花節はどこへ行く

今日の浪花節は過渡期だとおもふ。黄金時代だと云ふ人たちがあつたが、私はさうは思はない。好況時代かもしれないけれど、内容的には過渡期である。嘗て OA にゐた飛鳥常矩君は、浪花節の人の家へ行くには細かい番地はいらぬ、いいかげんにその土地へ行つて邊りを見廻す、そして天理教か人のみちみたいな金殿玉樓が見えたら、その家だと定めて入つて行けば間違ひないと云つてゐたけれど、今や浪曲家はその俗悪な生活態度をかなぐりすてて、もつと品のいい生活と藝術との林の中へ分け進まうと心がけてゐる。演出法も、めきめき、上品になつて來た。が、問題はここである、危機も亦ここだとおもふ。

希くは品好く／＼と無暗に品好くなつてしまつて、昔の葬ひの菓子みたいな無味乾燥のものとならないやうに。例へば前田雀郎君らの上品振つた俳句擬ひの非川柳

と同じになつてしまつたら、全く意味ない。豊後可愛や丸裸と云ふところに汎ゆる市井藝術のいのちはある。浪花節も全く同じであくまで立ちぐひの鯨、天ぶらのよさである。百疊敷のドまん中で、小笠原流のにぎり鯨をなんてのは、全く以而頂き兼ねる。夕涼よくぞ男に生れてほしい。但、車夫馬丁の Y 談と、インテリ人の Y 談とは自づとそこに似て非なるものがあるやうに、我が浪花節もあくまで品好き市井の味であり、後味のいい庶民階級の挽歌であることを忘るる勿れ。忘れても、角を矯めて牛を殺すの下らない上品さに陥る勿れ。では、さつかけない持ち味を、そのさつかけない持ち味のまゝまで品好く聴かすには――。

此はあくまで演者自身の心構への問題だらう。日頃の教養（教育ぢやない）の問題だらう。丸裸で大偉人たるまで己を克服してほしいのだ。そこに近代浪花の、第二の完成は約束されよう。

「たらちめ」と云ふ落語がある。

お公卿様の御奉公に伺つてゐたお女中くづれが、庶民階級の八さん熊さんの女房となり、アアラ我君と上品な用語許り使驅して、八さんを驚倒させる悲喜劇であるが、もし、あのお女中が町住居の空氣の中に洗練され、しかも三分の昔の風雅さを忘れなかつたら、どんなに素晴らしいお神さんができ上ることであらう。

今日の浪花節の人々は、丁ど、その「たらちめ」の女主人公の正反對の位置にあるとおもふ。裏長屋のどんづまりで呼吸してゐた人々が漸く上品な世界の住人となつたのである。その上品さをすつかり身に付けてしまつたら、もう一ど彼らは、昔へ還れ。そして三分は昔の絨火な味をば彫り岩つくる櫻の花ほごチラと二の腕へ覗かせて見せて呉れ。そのとき全く浪花節は、匂ひあるいのちある独自の庶民藝術として最後の結實が約束されよう。

さて昭和十八年現在の時局以外の浪曲界の動向には、壽々木米若、浪曲協會會長任期中の協會の仕事として先づ先輩の供養塔建設がある。浪曲大系圖の編成がある

勤續曲師の表彰、次代曲師の養成、此らはもう已にやりつつある。可成のしごとをして來てゐると云へるだらう。のこる仕事は次代の浪曲家に「殊に關東の人たちに云ひ度い！」前述の私述べるところの關東節の本質をよく／＼再吟味再検討させ、一方できるだけ長期の連續讀物を讀む練習を積まさせてほんたうの「腕」を鍛へさせることである。只今開催されつつある、大阪歌舞伎座の七月一ヶ月にわたる、浪曲興行も結構ではあるが、五日間づつ同じ讀物と云ふのでは何にもならない。せめて十五日づつ位（讀める人は當然一ヶ月）同一演題の連續と願ひ度い。昔の浪曲家は克明に單念に十五日物一ヶ月物を連夜おもしろく讀みつゞけていつた。さうすると長い／＼物語の中にはヤマのない、極めてダレ場の、合の宿あひへ行き當る。ところがそこをばして先のおもしろいところの方を讀んでは筋がとほらなくなる。定連にもあいつ場當りだと叱られる。で據所なくそのダレ場をいかに愉しく讀むかを各自自得せざるを得なかつた。しかしこんなことが容易ならざる薬となつて他日極めて小手の利いた手練てだんとも亦なり得たのである。それが眼前の榮譽にのみ憧れて寄席

よりも大きな小屋へ許り進出し度がり、圓盤の普及はさらに此へ拍車をかけ、誰も演題が殆んど短期興行の一席物許りとなつてしまつた。本人たちはそれでもよからうが、此からの若い人たちがこの方法を學んでは、腕の上がらうわけがない。大家諸君はこの邊へよく留意されて、くれぐれも次代の若人たちのため、寄席擁護と長期連続講演とを配慮して貰ひ度い。それ以外には浪花節百年の基はないと斷言しておかう。

昔は初代樂遊の悟樂齋三叟あたりでも生活は質素なものだつたと訊く。それが天理教の御殿のやうな住居を構へだしたは正しく雲右衛門の惡風と云へる。文化的に向上するとはそのやうなことは正しく正反對の、「簡素の中の美しさ」にしみぐと自分の藝をみいだすと云ふ生活のことだらう。現在の大家たちはよくこの點を反省して、次代に備へていただき度い。

昨春だつたか、一昨冬だつたらうか、覆面の小冠者として私は、戯れに某新聞へ左の小文を發表した。

世に愚かしきもの、女流浪曲家の藝名なる可し、春野百合子、富士月子、せめて雲井式部とまではよけれど、女虎造、女米若、女左近に至つては何ぞその低調なる、何ぞその愚劣なる。

◇

姫御前のあられもなくクルリと毛むくじやらのお尻をまくられたるやうにて、この看板見てお座のさめざるものあらんや。

さらに、さらに、罪深きものには何々嬢と云へるがあり。

曰く、雲月嬢。

曰く、虎造嬢。

曰く、榮華嬢。

曰く、照子嬢。

いやはやごうも呆れ返つて、反つくり返つて、天神さまの脇差、イヤになりんこ

トンとろんことは、このことならんか。

あ、かりそめにも大和島根の花ざくら、職域奉公これ努めんてふ女流浪曲家の御歴々が、自分で自分を「嬢」とは全體何ごとぞや、じやう談から駒がでるとは、正にこれから始まつたるなるべし、昔、緑雨が一文には「若先生閣下様」としたためたるあやしき手紙のこと書きてあれど、今の世の浪花節の何々嬢は、宛もその珍宛名にも匹敵す。

◇
映畫俳優、藝名放棄説ある今日只今、大日本浪曲協會よ、全協會員を動員し、速かに「女」と「嬢」を抹殺す可し、げに、「女」と「嬢」こそは日本藝能文化史上の一大恥辱なること、卿ら果而しるやしらすや。』

それから一年以上経つた今十八年六月廿一日東京新聞藝能面には「嬢廢止——浪

曲一步前進」と題して左の報道がもたらされた。

『從來浪曲界には藝名に「嬢」を付する者が相當にあり、浪曲協會では之を固有名詞として格別意にも介しなかつたが、見方によつては「嬢」は一つの敬稱であり、ピラ及び一般印刷物に自ら敬稱を付するは藝人として不遜である、といふ聲が近來識者間の話題となつてゐたが、浪曲協會でも一應之を尤もなる説とし、先頃協會員一般に、

（既に嬢を名乗る者は別として今後命名する者は一切讓の字を遠慮する事）
を通過したが、多年「嬢」を付して賣込んでゐる鈴木照子嬢、天津羽衣嬢の兩名から爾後「嬢」の抹消を申出で、鈴木照子、天津羽衣としての鑑札書換を願出た。』
斯道のため、心から私は祝福しないわけにはゆかなかつた。

次に個人的動向としては津田清美が、今十八年早夏二代目を櫻童に讓つて隱退した。また今年六月伊豆伊東へ轉地してゐた私は土地の劇場の演藝大會へ「小松嵐」

の二世樂遊（悟樂齋）の加入してゐることを、偶々近日びらで知り得た。新講談に轉向して秋津櫻洲。脇にまちがへて初代樂遊と註してあつたが、蓋し時代を同じうする人氣者、往年の一心亭辰雄が今や服部仲として講談に覇を唱へて來たので對抗しようとの思ひ付きかもしれないが、啖呵（會話）よりも節で知られたこの人の講談轉向は果而どのやうなものだらうか。

さて今後の國家的なお役に立つ「面」の浪曲の節調としては、熟考するに先代虎丸の安中草三、千住の捕物に於るあの合の子の急速快調、あれを聲帶の合ふ人が踏襲し、須らく士氣鼓吹にはあれで行つて貰ふ可きぢやなからうか。もちろん虎丸そつくりもいいし、あれに暗示された新快調あればそれも尙いい。あの急テムボ明朗節で、増産浪曲、總進軍浪曲、何でも元氣に景氣好くねがひ度いものである。

最前『浪曲作家』の章で引用した森田たま氏のごとき、先代虎丸の安中調を聴かせたらたしかに浪花節にもこの「勇ましい」面あるかと再び驚かれるにちがひな

い。さうして哀調の人は救ひのある哀話秘話を、また古典に長ずる人はあくまで古典を、その古典も亦金襖の名手はあくまで金襖を、端物三尺物の上手はそれぞれ己の得意とする世界を、只管掘下げ、精進していつて貰ひ度い。蟹は甲羅に。何よりそれが職域奉公の眞精神にも協ふものなので、誰か綾太郎の乃木將軍を、樂燕の切られ與三を尊しとするものやある。職域奉公とはナヤマシ會のことではないのであると云ふことを、要路の方々も浪曲家自身もよく／＼辨へてほしいとおもふ。ただその演出方法は時代々々であしきを削り、佳きを加へ、此は大いに原作精神を傷けぬ範圍に於ては研究改訂してほしい。ごこをどう削るべきか足すべきか、此は「藝」のよく分る適當な文化人の指導を仰ぐべきである。此以外に決戦下の浪曲家が心すべきことはないとは私は信じて止まないのである。

終りに臨んで、嘗ての日の憂愁はせていつくそなた 曲關東節へ、限りない哀惜もて私の諷つたつたなき小曲一篇がある。

それを左へ紹介し、次代のわかき關東浪曲家諸君に味讀してもらはう。もしこの

つたない竹枝の中から卿らの父祖の聲を聴くことのできた人々は、たしかに共に語るに足りると云ひ切れるからである。

なにはぶし

夜ともなれば

そのかみの江戸の下町びと

鶴賀、富士松の新内ぶしに、情のうたに涙ながして、嗚咽しぬ

明治の末より大正へ

かの癸亥、大地震ののちは

他も、吾も、俄に心あわただしく

今度は關東節がウレヒの紋の撥さばぬ

ちりちつとんちつとんとんに

あはれ 去にし日の新内流し

てんぶらくひたい、ちんころふんだの哀歡をそのまま

身近に感ずるやうとはなりぬ

亡き重松の低唱微吟

ときに夜空に花火玉の碎くるがごと

鐵火にいとふし張上げしことよ

跛の重正 霜枯れし うらぶれし

本所うら街のランプの灯影を

世にもマザマザと見せ付けて呉れしことよ
初代小柳丸が暗き面輪よ慘しき節よ

あはれはれ

げに關東節にふりかゝる月影こそは

この人の世の情なりけれ 涙なりけれ

さればいつ迄も いつまでも 關東節よ

そなた、哀しく

泣いじやくりてあれ

あ と が き

「雲右衛門以後」を、世におくることゝなつた。私一個の好嫌を別としてなら、何と云つても近世浪花節の世界に於る桃中軒雲右衛門の存在は、いろ／＼な意味に於ての巨樹巨木だつたらう。即ち便宜上、そこらからかき起して現在に至るまでの私流の浪曲發達史がどうやらいまごろに結實を見たのである。喜びとし度い。

「雲右衛門以前」と題する浪花亭駒吉、初代愛造の飛躍を中心に、それ以前の明治初年から江戸時代に於る説教、祭文、阿呆陀羅經の變遷、さらにまた溯つて南方、支那、朝鮮を経て始めて我朝へ渡來して來た何萬年か前の浪花節母胎時代に至る研究も全稿殆んど完成を見てゐるから、機あらば姉妹篇として上梓し、以而、首尾一貫させ度いとおもつてゐる。

おもへば礎稿の一部は、雑誌「公論」の昭和十六年七月號へ、舊知上村編輯長、田中榮氏らの好意で發表、當時、山田耕筰氏など愛讀して下すつたと、傳へ聞いた。尙引續き發表して行く心意だつたが、そのころ今日とはまた別な意味での時局緊迫のため、綜合雑誌と云ふよりも時局雑誌に近い同志は松岡洋右號、獨ソ開戦號などに全誌を擧げて尙且足らざる有様だつたので、自發的に續載を見合はせてしまつた。以來稿を更むること幾度か、漸く今日のこの一本に及んだものである。おもへばそれから足かけ三年の歳月が經つてゐる。その間には世の中も變つた。私自身も随分變つた。いまや多少の感慨なき能はない。この計畫を一ばん最初にすゝめて呉れたはいまビクターレコードにゐる小野金次郎君であり、次いで和田芳惠君だつた。和田君は執筆中も何彼といい智慧を貸し與へて呉れた。

ところで、明治末年篇、木村重松の項を讀んで下さると分るが、私は年少から荷風文學鏡花文學の影響を受けて、凡その浪花節嫌ひだつた。あんなもの、田舎者の聽くものだと輕蔑し切つてゐた。それが生粹の江戸つ子たる詩人金子光晴君にすゝ

められて以來と云ふもの、絶大なる關東節の愛好者となつてしまつた。故に、私はこの稿を爲すにあつて、浪花節嫌ひの心持にも深く立至つて執筆できたことを何よりの歡びとしてゐる。序に云つて置くが、私は浪花節しか分らないと云ふ手合も嫌ひなら、浪花節なんかと味ひもしないで蔑んでゐる人たちも亦、大嫌ひである。

關西節に關する文獻は、昭和九年（或は八年か）二月號「中央公論」に發表された、平林敏滋氏の「浪曲興亡史」にやや詳しく傳へられてゐるが、「藝」の内膜までは全然觸れてゐない。關東節に關する文獻は石谷華堤氏の「浪花節漫稿」が昭和十年以降、伊藤痴遊の「痴遊雜誌」へ連載された。駒吉、愛造、雲右衛門についてだけ、比較的詳細に論評されてゐる。晩年の雲右衛門に關する限り、此は松崎天民氏の雜文集の中のもの、白眉だつた。他は殆んど参考書らしい参考書はなく、従つてこの貧しい一著が、はじめてこの世の中へ贈られる浪曲史であり浪曲研究ではあることになる。それだけに骨も折れ、楽しみも亦多かつた。

過去より現在へ。あくまでさうした歴史體の構成を採つて來たが、たゞ文章は世

話物作家たる私の持ち味を、殊更に枉げようとはしなかつた。むしろ、なるべく、ナンドリとやはらかに書くことを心がけた。殊に、耳朶にのこつてゐる先人の藝風などは、無味乾燥たる一片の歴史的記述としないで描寫體を用ゐたりした。あくまで私流のとはじめに斷つた所以である。些か私にはそこが味噌でさへある。そのお含みでお讀みを頂き度い。

最近、私は田山花袋氏の「近代の小説」をじつにおもしろく讀了した。明治から大正への追憶體隨筆體の小説史なのであるが、自然派の巨匠たる花袋氏は自然主義の系列に屬する小説家について叙するところはいと多く、反對の作風傾向を有する荷風、鏡花、万太郎などに對しては甚だ冷淡にしか記述してゐない。一讀大へん不満ではあつたが、よくよく考へて見ると、蓋し此が人間としては一ばん自然な正直なところなので、もし荷風、鏡花、万太郎側の人たちが「近代の小説」を書いたとしても、やはり自然派の人たちに對しては痒いところへ手の届くまでには紹介してやらないに違ひない。私のこの「浪花節史」も亦同様で、所詮は關東節溺愛者の渾

身の情熱もて創り上げた年代史。どうしても關東節にたいして、偏愛であることを作者自身一ばんよく知つてゐる。が、此は前述の花袋氏の場合と同様で希くは他日誰か關西節愛好者にしてまことの藝術に參するの士が、別にその立場からの「浪花節史」を完成してほしい。私としてはそれを希望するのみである。

卷末に浪曲大系圖を附することを和田君岡戸武平君からすゝめられ、十中九まで完成してゐるが、些か調査未到のところもあり、最近玉川勝太郎君から聞いた話では幸ひに壽々木米若君の手で同様のものができるよし。即ちそれを參照した上によつと、この方は「雲右衛門以前」上梓のときまで保留の止むなきに至つた。大へん残念であるが、半チクのもを掲げるのは、作者としてさらに不本意であるから、諒としてほしい。

私が多く關東節の臺本をかいてゐたころの作品の中で、作詞、節附、藝この三つが渾然と一致していまもなつかしく圓盤にのこつてゐるものは、僅に故小金井太郎の「高橋於傳」木村友忠の「村井長庵（おそよ殺し）」木村重行の「唐人お吉」花

井お梅後日」、廣澤虎造の「吹雪峠」(宇野信夫君原作)玉川勝太郎の「十二階の仇討」「次郎長裸道中」(再訂ビクター盤のもの)相模太郎の「大力無双」位のものだつたらう。「大力無双」はそのうち全く別箇の物語にかき直して、小説「狐祭」の一部としたが、この小説の方は餘りいゝ出来ではない。他に玉川勝太郎のお家藝「天保水滸傳」は全段殆んど私の改訂作詞に據つて語られてゐる。でも多少なりとも私の息吹のかゝつてゐる舞臺作品はこの「水滸傳」位のもので幸か不幸か私は新作のこなし得る浪曲家と餘りめぐりあはなかつたので圓盤臺本のみを徒らにおびたゞしくかきちらした結果とはなつてしまつた。前掲重行の「唐人お吉」などは圓盤用の臺本を本人が勝手に引延ばして高座でやつてゐるから、どんな作者の意圖とは別箇な妙なことを云ひだしてゐるか分つたもんぢやない。(序に「日本音曲全集」の「浪花節全集」に「原敬」を、私の作品として明記してゐるのも、少しく困る。度々云ふ通り私は、そのころの浪花節作品に於ても亦、生粹の世話物作家で「原敬」のごときは、單に囑されて、先方の提出した材料を脚色してやつたに過ぎないのであるから。もう今日ではどうでもいゝことであるけれども、この機會に一言しておく)私が浪曲臺本をかくことが全くいやになつてしまつた理由は、本文の「戦争と浪花節」中の浪曲作家の項を読んで下すつた方々には直ちに諒解されることゝおもふが、その意味に於てはこの「雲右衛門以後」並びに「雲右衛門以前」も!)を世におくりだすことは、正しくいまの私にとつては例へ過去何年の月日にもせよ、起臥を共にして來て呉れた關東節の世界への、永遠の訣別の辭であると云ひ度い。またその訣別の日の、貪しき贈り物であるともし度い。全く關東節こそは暗黒そのものだつた私の青春の記念であり、佳き慰藉だつた。不幸の失意のどん底にあつたそのころの私を、うそもかくしもなくこの一と曲は^かごんなに慰め、いたはり、時には一しよに手をととりあつて泣いて呉れたことだつたらう。

關東節よ、浪花節よ、さらば——とおしひに涙ぐましく私のかう叫ぶ所以である。

昭和十八年盛夏、釣葱の風鈴切りに鳴る日、東都巢鴨龍安居北窓下

作者

追記。参考書の一部を、田村西男、田中煙亭、野村無名庵、岡戸武平氏の恩借に甘へ故實については一心亭辰雄(服部伸)、浪花亭峰吉兩師の示教を何彼と仰いだ。私の多難な小説道修業に多くの友情を注いで呉れてゐたそのころの厚誼を記念し度く玉川勝太郎君には、扉繪を描いて貰つた。文林堂双鱼房主人の厚意と共にそれへ謝し度い。

昭和十九年三月十日印刷
昭和十九年三月二十日發行

(初版三〇〇〇部)



(出版會承認)
イ240466號

雲右衛門以後奥附

實價合計二圓六十四錢

Ⓢ定價二圓五十錢
特別行爲
稅相當額 十四錢

著者 正 岡 容

發行者 淺見文吉

印刷者 土屋信平

印刷所 一貫堂印刷社

配給元 日本出版配給株式會社

版元 文林堂双鱼房

東京都牛込區市ヶ谷臺町四番地
會員番號一二八〇九四番
電話四谷(35)二九七七番

終

